
ある、姉弟の願い

MISAKO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある、姉弟の願い

【Nコード】

N3135U

【作者名】

MISAKO

【あらすじ】

冬木の第五次聖杯戦争はセイバーが聖杯を破壊したことで無事(?) 終結した。平穏な生活を送る士郎のもとに、なぜか再び赤い弓兵と謎の美少女が現れて……? 聖杯を閉じたイリヤと付添いのエミヤが、あちこち寄り道しながら、もといいた世界を目指します。ご都合主義満載です。

原作:「Fate/stay night」(PC版ゲーム)

参考:「Fate/hollow ataraxia」(PC版ゲーム)、「Fate/Zero」(星海社文庫全六巻)、「Fate

e / complete material」（発行エンターブレイン全四巻）

原作破壊まではいきませんが、イリヤ救済のためテキストウ設定で
す 確信犯

第一話 F a t e ルート後 再会？違います（前書き）

この物語は「F a t e / s t a y n i g h t」（PC版）をご存じでない方には、少々わかりづらいです。
あらかじめ、ご承知おきください。

第一話 F a t e ルート後 再会？違います

「なんでさ」

居間に入るなり、この家の主、衛宮士郎が呟いてしまったのは、無理のないことであつた。

「お邪魔してるわ」

「勝手に上がらせてもらつて申し訳ない」

聖杯戦争が終わり、三年生になつて間もなくのこと。

学校から帰つてくると、誰もいないはずの居間で、銀髪で赤い瞳の二十歳前後くらいの少女と、白髪で褐色の肌の、遠坂凜のサーヴァントであつたアーチャーと瓜二つの男性が、仲良くお茶を飲んでいたのだ。少女の方は簡素な白いワンピース、男性は黒い長袖シャツと黒のスラックス、といういでたちだ。

「何なんだ、お前たち。勝手に」

男性の方が右手を挙げて士郎を制した。

「お前の分も入れよう。うん、まだ大丈夫だな」

流れるような手つきで士郎の分のお茶を入れる。

（そつえば、アーチャーって凄腕の茶坊主つて遠坂が言つてたけど……って違う！）

「お前、アーチャーなのか？それにしちや普通の服だけど。なんでいるんだ！？聖杯戦争はとうに終わつてるぞ。サーヴァントは誰もいない。それにそつちの子は、いったい誰なんだ？」

「それより、凜たちはどうしている」

「はぐらかすな！」

つい叫んでしまつてから、士郎は相手が極めて真剣な顔をしている

ことに気付いた。

「遠坂は元気だよ。今日もじきに来てくれることになってる」

「桜は」

「……慎二の奴が行方不明になってしまつて、一時はすごく落ち込んでいて、でもイリヤのおかげで一応元気になったけど」

士郎の言葉を聞くと、男性と少女は顔を見合わせて頷きあつた。

「……イリヤは」

「雷画じいさんのところにいるよ。イリヤも後でくるぞ」

「そうか。できれば、凜とイリヤを呼んでくれないか？皆揃つてから事情を説明したい。二度手間になるからな」

「ところであんたたち、なんなの」

「アーチャー？と、お母様に似てる？」

やつてくるなり凜は来客二人をジト目で睨み、イリヤは怪訝そうな表情をした。

「落ち着きなさい。ふふ」

「落ち着きたまえ。衛宮士郎、お茶うけはあるか？」

マイペースで受け答えをする二人に、士郎は軽くめまいを覚えた。

「並行世界、といえばわかるかしら。私たちは、こことは別の世界で聖杯戦争を終わらせてきた。あちこち寄り道してしまつて、ここも目的地ではないのだけれど、最終的にはあの世界のシロウたちに会いに行きたいの」

「並行世界！？大師父でもないのに移動できるわけないでしょう！？」

「聖杯のおかげ、だろうがね。まあ、まずは自己紹介といこうか」

来訪者たちは頷きあう。

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

少女の名乗りに、イリヤは呆然としている。

「私は……アーチャー」

「真名を名乗った方がいいと思うわ、シロウ」

「しかし」

「貴方の正体を話しておいた方が、後の心配も減るでしょう？」

はあ。溜息をひとつつくと、男性は士郎を見つめた。

「英霊としての真名はエミヤ。かつて人間だった時の名は、衛宮士郎。つまり、並行世界の未来のお前、ということになるな」

自分たちを逃がすため、バーサーカーに一人立ち向かっていった力強い背中と、そのとき貰った助言を思い出す。

「お前は……俺なのか」

「完全な同一人物、ではないだろうから安心しろ。私は聖杯戦争のあとでアーチャーに再会したことはないからな」

「でも、髪や目の色はどうしたんだ」

と言いかけてから、士郎はいきなりシャツの左腕の袖をまくりあげた。

「ちょっと、士郎？なに、その肌！」

凜が声を荒げる。イリヤは静かに士郎とエミヤを見つめている。士郎の左腕には黒く変色した部位が見受けられた。

「投影魔術の副作用だ。ろくに魔力もないのに宝具を投影すると、そういうことになる。おそらく、お前の髪の一部は白髪になっているのだろうな」

エミヤはしみじみと士郎をただ、見つめる。その穏やかな様子に、士郎は違和感を覚えた。よく考えたら、聖杯戦争中、アーチャーはいつも自分に厳しい眼を向けていた。なぜ今は、態度が全然違うのだろう。

「ちょっといい、アーチャー」

凜はにこやかに告げる。その素晴らしい笑顔に、士郎はなぜか寒気を覚えた。

「あんたは、記憶喪失とか言ってたけど、とぼけていたのね？」

「いや、召喚の影響で、本当に記憶を失っていた。凜が名前を教えてくれたとき、ある程度は思い出したが」

「なら、なんで教えてくれなかったのかしら、『衛宮くん』？」

「その呼び方はやめたまえ、ややこしい。……言えるわけ、ないだろ、遠坂」

小さく呟くエミヤを、ふたりのイリヤは静かにじつと見つめる。小学生程度の童女と二十歳くらいの少女、外見年齢が全く異なるが、不思議なほど、そっくりな表情である。一方、士郎はしげしげとエミヤを見つめる。よくよく見ると確かに顔立ちは自分と似ているかもしれない、とは思うが、白い髪、灰色の瞳、褐色の肌、一九〇センチ近くの長身、どれもこれも自分とは違いすぎる。しかし、なぜ彼はつらそうに目を伏せているのか。なぜ、聖杯戦争の時に正体を告げなかったのか。

「なんでさ。そりゃちよつとアレかもしれないけど、お前は英雄になれたんだろう。なんでそんな顔をしているんだ？」

凜は、はっと目を見開いた。

「……そうだったわね。悪かったわ、アーチャー」

「どうということなんだ？」

「言っていい、アーチャー？……私」

「マスターとサーヴァントはつながりがあるせいで、お互い相手の記憶を垣間見てしまうことがある。私の記録を見たのだろう？ 凜」

「ええ、見たわ。あんまりひどいんで、とても貴方に腹がたったのを覚えている」

凜はエミヤを思い切り睨みつけ、エミヤのほうは無表情になった。

「……遠坂？」

「衛宮くん。今のままなら、貴方もアーチャーと同じ道をたどるところになる。だから、この際、教えてあげる」

そして、凜は告げる。ただひたすらに「正義の味方」を目指した男の物語を。たった百人ばかりの人々を救うために死後を「世界」に売り渡して、「抑止の守護者」になる契約をしてしまう。全てを救

うことができた時もあり、英雄と呼ばれた時もあったが、たいいていの場合、どうしても取りこぼしが出てしまい、「一を切り捨て九を救う」ことを選ばざるを得なくなる。それでも諦めず、自分のできる範囲でひたすらに人々を救っていたが、最終的に、味方に裏切られて戦犯に仕立て上げられ、絞首刑で人としての命を終えた。しかし、英霊の座に就いた彼にはさらに過酷な運命がまつていた。

「『世界』と契約、なんて、本当に馬鹿なことをしたものよね。守護者になってしまったせいで、アーチャーはさらにひどい目に合ってしまうんだから」

「なんでさ。守護者になつたら、もっと多くの人を救え……」

言いかけた士郎はぎょつとした。あの遠坂凜がいまにも泣きそうな顔をしている。エミヤは苦々しげに言う。

「衛宮士郎。私も同じ誤解をしていた。抑止の守護者は、簡単に言ってしまえば『掃除屋』だ。世界の滅びの要因のもとに現れ、そこにいる全てを殺し尽くす、ただそれだけの存在だ。今の私は、自身自身の意思さえ持てない、『世界』のための殺戮人形にすぎないのだよ」

「シロウは永遠の地獄に落ちてしまった。でも、今回の聖杯戦争が、少しは救いになったのかもしれない」

違う？と大きいイリヤはエミヤににじり寄り、そつと頭をなでる。

「……そうだな」

エミヤは少しだけ嬉しそうに、目を細める。

こいつは本当にあのアーチャーなのか？なんというか、やたらイリヤに甘やかされていないか？

士郎は大いに疑問を持たざるを得なかった。

「だって私はお姉ちゃんだもの。弟を甘やかしたっていいでしょう？」

「心を読むな！っていうか『お姉ちゃん』？」

「イリヤは切嗣の実の娘で……お前や凜より、確か一歳くらい年上だぞ」

「「嘘!?!」」

「ねえ」

それまでだまっていた小さいイリヤが口を開いた。

「アーチャーのことは、それくらいいいでしょう。それより、どうして貴女は年相応に成長しているのかしら?『イリヤ』」

「そろそろ夕食の準備をしたほうがいい。藤村大河が来るのだろう?」

エミヤの落ち着きのある声が居間に響いた。

「え、でも」

「虎が大暴れしても構わんと?何なら私が作るが」

「俺がやる。調理器具の場所、わからないだろう」

士郎が立ち上がり、台所に向かう。エミヤも士郎のあとを追った。

「ねえ。話をそらす気なの?」

小さいイリヤがむくれる。

「シロウのは言葉通りよ?簡単に終わる話じゃないし、ご飯のあとでもいいんじゃない」

首をすくめる大きいイリヤに、凜は切り出す。

「藤村先生向けにカバーストーリーを作る必要があるわ。いい案ある?」

「私が、このイリヤのいってことにしたら?シロウも髪の色が似ているから、私と兄妹ということにしておいて。あ、シロウはアーチャーと名乗っておくべきかしら」

台所にて。二人のエミヤはまず冷蔵庫の中を覗く。

「アーチャー、料理できるのか?」

「誰に向かって言っている。一番得意なのは、和食だ」

「……やっぱり」

「海外では和食の材料が手に入りにくいから、洋食も中華もそれにできるようになった。家庭料理レベルだがな」

「海外、か」

「あまり手を広げすぎると、私のようになる。焦らないことだ。さて、何を作る？私が手伝えば早く終わるぞ」

エミヤは無邪気な子供のように笑った。

あの皮肉屋の態度はどこにいった。絶対おかしい。士郎は少し混乱した。

「……衛宮士郎？」

「あ、あまり時間がないから、カレーライスでいいんじゃないかな。材料も揃ってるし」

「そうだな。ではまず下ごしらえか」

「わー、イリヤちゃん似の美人さんという男!!」

「おー、と野生の声が聞こえるような気がする。いつも元気いっぱいの、太陽のような藤村大河が夕食時を狙って登場した後、大きいイリヤとエミヤを見て、思い切りテンションを上げている。

「お客さんに料理させちゃうなんて、もう、士郎ったら。ええと、お二人とも、お名前をうかがってもいいですか？」

「私たちはそのイリヤスフィールのいとこよ。私も偶然イリヤスフィールっていう名前。こっちは、兄のアーチャー」

料理をしていたため打ち合わせを聞いていなかったエミヤは目を一瞬見開いたが、配膳をしながら、

「あなたが藤村大河さんですね。イリヤがいつもお世話になっております」

と軽く頭を下げた。

「わー、顔もいいけど声もす・て・き」

「はあ、どうも」

アーチャー、こめかみに冷や汗が流れているぞ。思わず心の中で士

郎と凜は突っ込みを入れた。

「藤ねえ。しばらくアーチャーたちをここに泊めていいかな。いと同じ土で積もる話もあるだろうから、できたらイリヤも一緒に」

エミヤと同じく料理をしていて打ち合わせを聞いていない士郎も、未来の「心眼（真）」のスキルを垣間見せ、うまく話を切り出した。「うーん。男の人がいるなら大丈夫ね。信用してるからね、士郎」と言いながら、大河はカレーライスをパクついた。ほかのメンバーが一杯食べる間に三杯完食し、

「士郎、デザートは？」

「まだ食うのかよ。わかった、リンゴむく」

という具合。その様子をエミヤはなつかしそうに眺めていた。

「帰ったな」

「帰ったわね」

大河がにぎやかに引き上げていった後、士郎と凜は、はあ、と溜め息をついた。さっそくエミヤが食器洗いをしている。なんか異様にいきいきして見えるのは、きっと気のせいではないはずだ。

「アーチャーって、家事、好きだったんだな」

「未来のあんたでしょ」

「シロウ、かわいいでしょ」

「確かにシロウ、なのね」

食後のお茶を飲みながら、残りのメンバーはエミヤが戻ってくるのを待った。

「すまなかった。さて、イリヤの質問の件だが、答える前に、こちらの聖杯戦争がどうなったか、概要を訊きたい」

「それとイリヤのことと、なにか関係あるのかしら」

「大いにある。まず、大聖杯が、円蔵山の地下にあることは知っているか？」

「へ？」

「大聖杯？」

士郎と凜ははてな？と首をかしげた。

「……私は知っているわよ、勿論」

「アインツベルンが知らないわけない、な。では、聖杯が『誰』なのかは知っているか？」

「私」

エミヤと大きいイリヤは頷き合った。

「ここではイレギュラーは起きなかったのだな。ただ、ここにイリヤがいる、ということは、聖杯は破壊されたのか」

「あんなもの、必要ないだろう。セイバーが、エクスカリバーで吹き飛ばした」

「士郎から聞いたんだけど、呪いの泥があふれていたとか、らしいわ。結果論だけど、壊して正解だわね」

もったいない気もするけどね。凜は目を細めた。

「で。あんたたちの聖杯は」

「破壊できなかった」

「……げ」

「まさか、十年前みたいに」

士郎の顔色は蒼くなった。

「私が、聖杯を閉じたのよ。その前に、いろいろあって被害者がかなり出ているけどね」

「大体、大聖杯を壊せる人員がいなかった。最終段階で現界していたサーヴァントはライダーだけだったからな」

「は？でも、セイバーやアーチャーは？」

「残念ながら、途中退場している。もともと、偶然、私の一部が現界していたので、ある程度状況は知っていたが」

「一部？」

なんか嫌な予感がひしひしとする。

「街のあちこちに、妙な闇が出現し、被害者がかなり出た。いろいろあって、凜が闇に切り裂かれるところをかばったら、こちらまで致

命傷を負ってしまったてな」

「同時にシロウも闇に切り裂かれて、左腕を失ってしまった。あのままだと確実に死んでいたはず。アーチャーはシロウを救うために、自分の左腕をシロウに移植させた。シロウは腕と一緒にアーチャーの経験を手に入れた。そう、シロウはアーチャーの知識・経験をもとに高度な投影を使うことが可能になった」

「私はイリヤに回収されたが、左腕は現界していたせいか、衛宮士郎を通してその後あったことも認識している」

サーヴァントの一部を人間に移植なんて無茶だ。まず、不可能のはずなのだが。

「ふつつ死ぬわよ、アーチャー」

凜は額を押さえた。

「いちおう聖骸布で封印してあった。封印を解くと私の能力が使えるが、そのかわり衛宮士郎はどんどん壊れていった」

「なっ」

「多分大丈夫よ、シロウには不完全だけど第三魔法を使ったから、あとはリンが何とかしてくれたと思うわ」

大きいイリヤは微笑んだ。

「貴女は聖杯になることを選んだのね。そうでなきゃ第三魔法なんて使えない」

小さいイリヤは目を吊り上げた。

「そうしないとシロウが無茶な投影で死んでいたから。お姉ちゃん
は弟を守らなきゃ」

大きいイリヤは士郎を見てにこりとした。

「それでね、本来なら私はあのまま死んでいたはずなんだけど、どうやら私とアーチャーにも第三魔法がかかってしまったらしいのよね」

「意味が分からないわ。アーチャーは現界していなかったんでしょっ」

凜は首をかしげ、小さいイリヤはむうつとふくれた。

「後で詳しく話すけど、まともに私が回収したのはアーチャーのみ。アーチャーとライダー以外のサーヴァントは、偽物の聖杯が回収したの。最終的に私が全てを受け取ったけど、聖杯を閉じたとき、アーチャーだけが、私のそばに突然出現した。しかも受肉して、ね」

「驚いたぞ、あの時は。衛宮士郎にやった腕も戻っているし、目の前のイリヤは姿を変えていたし。実年齢通りの十八歳の少女になっていたからな」

「もう一度人生をもらった、と思うことにした。気がかりは、やっぱりシロウたちのこと。だから、またあの世界へ戻ることに決めたの。アーチャー……シロウもついてきてくれるし、ね」

「だが、最初に出たところはどう見ても異世界、だった」

エミヤは遠い目をした。

「武装をまとった私と、『天のドレス』を着たイリヤ。確かに怪しかったかもしれないが、いきなり攻撃魔法を浴びせられたのには驚いたな」

「ああ、あれね。『正義の魔法使い』だったかしら。一応私たちに確認してくれたらよかったのにね」

「あんたたちね」

凜はふうつと溜息をついた。

「それにしても、イリヤって十八歳だったのか」

「ふふ。お姉ちゃんって呼んでみる？シロウ」

小さいイリヤは意味ありげに笑った。

第一話 F a t e ルート後 再会？違います（後書き）

英霊エミヤは「F a t e / s t a y n i g h t」のうち、いったいどのルートを通ったのか？

・ F a t e ルート

かつて聖杯戦争をセイバーとともに勝ち抜いたと言っているし、セイバーの事情にあまりにも詳しくすぎる。セイバーに「お前を救えなかった」と言っているが、「救い」の定義をアーチャーがどこに定めているかはつきりしない以上、判断材料にはならない（よく、セイバーを聖杯への執着から解放し守護者にならないようにしたことをさして述べられるが、それに加えてセイバーが普通の少女として生きる時間を与えられなかった、ということかもしれないのである）

。原作ゲームをさらってみたら、F a t e ルートではキャスターのルールルレイカーレイカーの宝具を知ることがないこともある、ということを見つけた。U B W

ルートとH F ルートでは確実にキャスターの宝具を知ることができる。アーチャーはU B W ルートで凜の令呪を切るためにキャスターについたが、もしかしたら、アーチャーの剣の丘には生前ルールのレイカーは刺さっていなかったかもしれないのである。ただこれもアーチャーが凜を裏切った理由に、凜の命を救うためやむなく、という面もあり、結局ははつきりしない。このルートは限りなくアーチャーになりそうではある。

・ U B W ルート

最初の投影で士郎は半身の感覚がずれたが、アーチャーは片腕を持つていかれたと言っている。士郎はアーチャーの双剣を投影しても特に肌の変色などは起きず、凜とラインを結んで展開した固有結界でも後遺症はない。完璧にアーチャーにはならない。

・ H F ルート

士郎は万人の救済ではなく桜の救済を選んだ。アーチャーになり得

ない。

ただしバッドエンドの一つ、鉄心エンドでは、守護者になるかも知れない。そのかわり、アーチャーよりも反英雄になりそう。というかよく似た別物になりそうである。

なお付け加えると、おそらくアーチャーは生前桜の悲劇を知らなかった。知っていれば、自分の目的より早急に桜の救出を優先して動いたはず。桜の救出はそのまま冬木の人々を守ることにもつながるのだから。

結論：F a t e ルートかその近似ルートが怪しい。

以上考察終わり！

最後の方は、ちょっと微クロス。「ネギま」の世界へ行ってしまう。あまり長くはいませんでした。なお読者の方から、

「ネギま」に『正義の魔法使い』？

というご指摘がありました。これは、イリヤの記憶違い、という設定です。

第二話 F a t e ルート後 現況確認と鍛錬（前書き）

この辺から捏造設定が増えます。

第二話 F a t e ルート後 現況確認と鍛錬

夕食後の会合は続いている。

「もう、驚くことばかりだな」

「全くね」

士郎も凜も驚きあきれるしかない。

「ところで、慎二が行方不明、というのは嘘だろう。彼は死んでいる。違うかね」

エミヤがいきなり話題を変えた。士郎はあわてる。

「う……なんで」

「やはりか。何か隠しているような感じだったからな」

「でも、表向きには行方不明なんだ。桜は一般人だし」

「シロウ。この際言っておくけど」

大きいイリヤが士郎の言葉を遮った。

「サクラはマキリの魔術師よ。ライダーを召喚したのも、サクラ。

シンジはただの代理マスターにすぎない」

「え、そんな、まさか。臓硯が召喚したんじゃないの!？」

凜は大声で叫んだ。

「桜は、もともと間桐家の当主の、臓硯の命令でお前に近づいた。

お前は第四次聖杯戦争の実質的な勝者であつた衛宮切嗣の養子。警戒されるのは当然だ。聖杯戦争が始まる時期くらい、間桐では見当をつけていただろうからな。ただ、桜はこの家で、お前や藤村大河と接して、本当に救われていたらしい。慎二がいなくなった今、いったいどんな状態なのか、心配だ」

エミヤは士郎に知っていることをただ簡潔に告げる。

「桜に、何が起こっている、というの」

凜の顔色が蒼白になる。二人のイリヤは顔を見合わせ、大きいイリヤの方が口を開いた。

「サクラには、第四次聖杯戦争で破壊された聖杯のかけらが埋め込まれている。マキリに染め上げるために、体中に蟲を埋め込まれて改造されてもいるわ」

「何を、言っているんだ、そんな、わけわからないこと」

「シロウ」

「だって、慎二は魔術回路がないんだぞ。桜だって同じだろう。それに、桜は関係ないって、慎二は言ってた！」

「あいつはわかりにくい思いやりを見せるな、全く」

「やれやれ。エミヤは苦笑した。

「衛宮士郎、桜は自分が普通の少女だと、お前には思っていてほしかったんだ。慎二は桜のために、そういう嘘をついたに過ぎない」

「えっ……」

思わず黙り込んでしまった士郎にかわり、凜が訊ねた。

「知っているのね、桜が私の本当の妹だってことを」

「ああ、今回、知った。……本当に、驚いた。オレは、何も知らなかったんだと」

エミヤは目を伏せた。エミヤにとって、桜は藤村大河と同じ、平穏な日常の象徴だった。それが、全く違っていたなんて。桜が「あんなこと」になったとき、正直に言えば、殺してやるのも救いかもしれない、とは思ったが、それを決めるのは、桜にとって特別な男である衛宮士郎と、姉である遠坂凜の二人だけだ。自分は凜のサーヴァントとしてのみ動く、そう決めていた。

「私たちの聖杯戦争で、桜は偽物の聖杯として覚醒した。そして、大聖杯に眠る『この世全ての悪』とつながってしまい、正気を失い呪いの闇を操って、多くの人を殺してしまった。ここでは幸いにも桜は聖杯にならなかったようだが、放っておいていいとは思えない」
エミヤが衛宮士郎だったときの記憶はあまりに遠すぎて、召喚されてしばらくはさほど思い出していなかったが、セイバーとの遭遇をきっかけに、ある程度は戻ってきていた。しかし、その記憶の中に

は、桜が魔術師だと思わせるものはなかったのだ。

「アーチャー。桜を助けるにはどうしたらいいと思う?」

「凜」

「私、桜は普通に暮らしてるとばかり思っていたの。馬鹿みたい」
「だんっ! 凜はテーブルをこぶしで思い切り叩いた。」

「家同士の取り決めで、私たちは他人同士のふりをしているしかなかった。姉として、何もできなかった!」

「……それは俺も同じだ。いつも桜と一緒にいて、なのに何も気づかないなんて」

士郎が唇をかみしめると、小さいイリヤは首を振った。

「サクラが助けを求めないのに、リンやシロウに責任があるはずないでしょう。黙っているのが悪いのよ」

「それは少々厳しすぎないかね? 慎二でさえまともにSOSを出せていないのに。被害者本人が言い出せない、というのはよくある話だぞ」

「ゾウケンがそれだけ化け物、ということよ。全く、あれだけ素晴らしい理想に燃えていた人が……」

大きいイリヤのほうは、聖杯戦争終盤に出会ったかの蟲の翁を思い出す。

二百年前大聖杯の礎となった、ユスティツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルン、当時アインツベルン当主であった彼女は、間桐臓硯ことマキリ・ゾオルケンの気高い理想に大変感銘を受けている。ある意味彼女とつながったイリヤには、それがよくわかった。

「臓硯を排除できればいいのだろうが、あの老人は身体を蟲に変えてしまっているからな。本体がどこにいるかわかれば、さっさと殺しにいくのだが」

「殺すって、物騒すぎるぞ、アーチャー」

反射的に反論する士郎に、

「シロウはコトミネを殺したじゃない」

小さいイリヤが突っ込んだ。

「うっ」

「言峰は『生きた死体』^{リビングデッド}だったから、厳密に言えば殺したわけではないだろうがな。臓硯はすでに人をやめてしまっているから、殺人ではなく駆除だと思えばよからう」

かなりエミヤはむちゃくちゃなことを言う。一応正論であるだけに、士郎は反応に困った。

「サクラは学校にきているの？」

大きいイリヤの問いに答えたのは凜のほうだ。

「ちゃんと登校してきているわ。弓道部の副主将をしている」

「霊体化できれば偵察が楽にできるのだがな」

エミヤは自分の腕をさすった。受肉してしまっているので、隠密行動は極めて難しい。間桐邸をこっそり見に行く、なんてことをうつに行えば、間違いなく臓硯の使い魔に見つかる。

「あえてアーチャーにおとりになってもらったら？」

「いや、意味ないだろう、それ」

凜のただの思いつきともとれる発言に士郎が突っ込んだ。

「どう考えたってこの中ではアーチャーが一番強い。切り札は最後まで取っとくべきだろ」

「じゃあ、どうしたらいいのよ！このままじゃ桜が」

「落ち着きたまえ、凜」

ぽんぽん。褐色の大きな手が、黒髪の少女の頭を軽くたたいた。

「いつそのこと、小細工せずに正面から行くか？」

「なにセイバーみたいなこと言ってるんだよ、アーチャー」

キャスターを打倒しようと柳洞寺に一人で乗り込んでいった直情的なセイバーと、目の前のアーチャー、性格は全く違っているが、実は案外似ているんだろうか。

「衛宮士郎。私を猪武者扱いしないでほしいのだが？もちろん、やるにしても桜の身柄の確保をしてからになる」

「ここにセイバーがいなくて、よかったな。ぼこぼこにされと思うぞ」

「事実だろう。召喚されたばかりのセイバーはお前の命の恩人である凜をいきなり斃そうとしただろう？猪武者といわれてもしかたがない」

目撃者として、士郎は一度ランサーに「殺されて」いるはずなのに蘇っている。士郎は凜を見つめた。

「やっぱりあれ、遠坂が助けてくれたんだな。ありがとう、遠坂」

「な、何のことよ」

「あの赤い宝石で助けてくれたんだろ？」

「えっ？」

「いま、持ってくる」

ちよつと待つてくれ。そう言うってから大して皆を待たせもしないうちに戻ってきた士郎の手には、見事な赤い宝石のついたしゃれたアンティークのペンダントが握られていた。

「まさか」

凜はあわてて服の下からペンダントを引きずり出す。士郎の治療に使った後、忘れてきてしまったのを、アーチャーが届けてくれている。今では父の形見であると同時に、アーチャーを偲ぶよすがにもなっていた。士郎の目が丸くなる。

「なんでさ？同じのが二つ……」

「つまり、今凜が持っているのって、『あの』アーチャーから受け取ったの？」

小さいイリヤが訊くと、エミヤがそれに答える。

「ここでも同じことをしたのか。私も、凜にそれを返した。あの時助けてくれたのはうすうす気が付いていたんだが、その話をしかけるとごまかされてしまって、結果生前あいつには返しそびれていたんだ」

「これが、アーチャーを召喚する触媒になっていたのね」

凜はきつくペンダントを握りしめた。触媒を用意できなかったため自分の力だけでサーヴァントを引き当てたと思っていたが、実際はサーヴァントの方が触媒を所持していたのだ。

「さて、とりあえずどう動く？」

凜の感慨をスルーして、エミヤは話をもどそうとする。

「空気読みなさいよ」

「桜を助けたうえで大聖杯を破壊する必要がある。あまり横道にそれている場合ではない、と思うのだがね」

「大聖杯の破壊はアーチャー任せになるのか」

士郎が呟くとエミヤがにやりとして、何ならお前がやってみるか？と挑発するように言う。

「できるわけないだろ」

「『できない』と知っているうちは何もできん。まあ、確かに私がやるのが一番確実ではあるが……そういえば、やはりお前の魔術の師は凜なのか」

「え？ええ、私よ」

凜が答えると、小さいイリヤが赤い眼を怪しく光らせながら、

「シロウ、私の弟子になりなさい。いまからでも遅くはないわ」

と士郎を見つめる。

「イリヤ。魔眼はやめたまえ」

なんで話がそれまくるんだ。エミヤは顔をしかめる。

「アーチャー。何が言いたいんだ？」

「なに、お前の臨時講師になってやろうと思ったただけだ。お前の魔術の属性は『剣』。凜の属性は『五大元素』。私は当然お前と同じだからな。桜を助けたければ、戦力を引き上げる必要があるだろう」「回りくどい言い方すんな。わかった。俺に『エミヤシロウ』の魔術を教えてくれ」

アーチャーの言いたいことはよくわかる。

（遠坂もイリヤも優秀だからな。俺だけは落ちこぼれだが、その分伸びしろがあるってことか）

士郎はエミヤの鋭い眼光を受け止めた。

魔術の鍛練は、やはり土蔵に限る。二人のエミヤの意見は一致している。見物客を^{ギャフリ}なしにし、二人だけで土蔵に入った。

「まず、魔術回路の状態を見たい。シャツを脱いでそこに座れ」

「へ？ああ、わかった」

言われた通りにシャツを脱いで上半身裸になり、士郎は床に座った。エミヤは士郎の背中に手のひらを当て、目を閉じる。

（あれ？）

士郎は背中から流されてくるエミヤの魔力に全く違和感を感じないのに驚いた。……遠い昔、エミヤは衛宮士郎だったのだから、魔力の質が同じなのは当然なのだが。

「ふむ。魔術回路は私と同じで二十七本あるのに、実際は二本しか使っていないのか。鍛えがいがありそうだ」

「えっ、二十七本？」

「スパルタでいくから、覚悟しろ」

「……わかった」

士郎が返事をした瞬間、エミヤから流れてくる魔力がいきなりより強いものになった。

「三人だとちよつと狭いかしらね」

「お風呂、どうせならシロウと入りたい」

きやぴきやぴ騒ぐ銀髪の少女二人。

「貴女たち。余裕あるわね……」

なんとなく疲れた風情の黒髪の少女一人。

今後の大雑把な打ち合わせのあと、女性陣は入浴タイムだ。

「でも、やっぱり変だわ」

小さいイリヤが大きいイリヤを見ながら呟いた。

「何が」

凜は二人を見比べる。まるで年の離れた姉妹のようだ。

「聖杯を閉じる、ということは、『新たに聖杯の礎になる』ということなのよ？なぜ、ここに『イリヤスフィール』が存在できるのかしら」

「やはり不思議に思うわよね」

大きいイリヤは目を閉じた。今の自分の状態を鑑みるに、自分が人間とただのホムンクルスとも違う、ということを思い知らされる。「人間より高次元の生命体で、英霊や精霊に近い存在、それが私でしょう？私の本体はあの世界の大聖杯の一部になっている。そして、その分体が自意識をもったまま、受肉して、いまここにいる、多分そういうことだと思うのよ」

「それって、まるで」

英霊とサーヴァントの関係と同じだ。呆然とする凜と小さいイリヤ。「ところで、いつシロウにあの...ことを話すの？」

大きいイリヤは、もう一人の自分に、真面目な表情で切り出した。

身体が燃えるように熱い。魔術回路のスイッチ作りのために遠坂の宝石を飲まされた時よりひどい。

「ぐ、ぎ」

情けない悲鳴をあげそうになる。しかし、士郎はなんとか苦痛をやり過ぎそうとしている。

「耐える。そして慣れる。今、お前の持つ魔術回路すべてを活性化させている」

「この、い、きなり」

「無理して話す必要はない。一度に多くの魔術回路を使えるようになれば、皮膚や髪の変色のような副作用は起こりにくくなる。投影もだいぶ楽にできるようになるはずだ」

士郎からは見えないが、エミヤは人の悪い微笑を浮かべている。凜が時々浮かべる表情とそっくりだ。

「初代だからこそなのか、それともセイバーの聖剣の鞘を体に埋め込まれていたせいなのかは知らないが、お前はただ剣を作ることのみに特化している。さて、そろそろ落ち着いてきたようだから、エミヤシロウの世界を見せよう」
おれたち
ミヤシロウの世界を見せよう」
士郎の視界が、不意に変わった。

頭上を覆い尽くさんばかりの巨大ないくつもの歯車。空は煙と飛び散る火花のせいか灰色に赤みがさしている独特の色合いだ。果てしなく続く乾ききった不毛の大地に、まるで墓標のように数えきれないほどの剣が突き刺さっている。

（セイバー……、違う、あの丘と似ているけど、これは）

夢で見たカムランの丘と、どこか印象が重なる。違うのは、この景色の方がはるかに非常識であるということだ。

この景色の中にエミヤはいない。が、声だけが響く。

「見えているな？これは私の世界。固有結界『無限の剣製』、エミヤシロウが持ちうる唯一の魔術だ。では、ここにある剣をとにかく覚えろ」
安リリミテッドブレッドワークスお
れたち

「ちよつと待て！全部！？」

「無理だなどというなよ。ここには、お前が戦ったサーヴァントたちの宝具もある。もちろんセイバーの『勝利すべき黄金の剣』も『エクスカリバー』もある」
カリバーン

「なんか刃の曲がつた変な短剣もあるな。……むちゃくちゃな効果があるみたいだ」

「キャスターの宝具、『破戒すべき全ての符』だ。聖杯戦争で見えないのか？」
ルールブレイカー

「見てない。なあ、なんか、ここのエクスカリバー、微妙に違うなにか？どこがって言われたら困るけど」

「セイバーの聖剣のような神造兵器をただの人間が作れると思うのか？あくまで同じようなものをイメージして作り上げたにすぎん」
エミヤの声音は微妙にすねている。

「悪い。ちゃんと覚えるから」

少し笑ってしまった後、士郎は剣の連なる大地を歩き始めた。砕けてしまったカリバーンのかけらをもとに鍛え直したのがエクスカリバー、確かそんな言い伝えがあったはずだ。つまり、この二本は同時に存在することはない。そして。

「カリバーンもエクスカリバーと同じように作られたんなら、本来俺が投影できるはずがない。夢で見たのを参考にしておくまで俺のイメージで作った、そういうことだよな」

「そのとおりだが、今は余計なことを考えるな。明朝には桜が来るのだろう？」

いらただしげなエミヤの声にせかされ、士郎はひたすら周りを見ながら歩く。

「それにしても剣ばかりだな。いや、斧もあるか。金ギルひかの武器が結構あるな。……全部が必ずしも宝具ギルガメッシュつてわけでもなさそうだけど」

「死後、守護者として世界に召喚された時に見た武器の情報も登録されている。さまざまな時代によばれているからな」

つまり、ごく普通の剣・斧・槍なども数多く大地に突き立っている。いったい、アーチャーは、エミヤシロウはどれだけ戦ってきたのだろう？それほど長生きしてはいなさそうだから、大部分は守護者として戦った時に見た武器だろう。

「あ、これ」

アーチャー愛用の夫婦剣、干将・莫耶を発見した。思わず手で触れてみる。聖杯戦争中、士郎はアーチャーの武器をこれしか見たことがない。ただ、イリヤからは、アーチャーが様々な剣を用いて合計六つの命をバーサーカーから奪ったと聞いている。どういうことなのかと思っていたが、この世界を見れば一目瞭然、大英雄ヘラクレスを斃しうる剣を次々と投影して戦ったのだ。

士郎はセイバーから、剣の才能について「筋はいいが才はない」と断言されている。それはかつて衛宮士郎だったエミヤも当然同じは

ずで。それなのに最速のサーヴァントであるランサーの攻撃をすべて防ぎきり、バーサーカーを六回殺し、と信じられないくらいの技能を身につけている。

「すごいな。とっても努力したんだな」

「いい加減にしろ。時間は無限ではないのだぞ」

つい思考が目の前の世界からそれそうになると、エミヤから叱られた。

実はこれがほとんど睡眠学習と同じで、この世界すべてを見終えても一晩しかたっていないのを士郎が知るのは翌朝になってからのことである。

第二話 Fateルート後 現況確認と鍛錬（後書き）

間桐慎二について、個人的妄想。

原作ゲーム「Fate/stay night」（PC版）をプレイした人たちからは異論が多く出そうですが、「Fate/hollow ataraxia」をプレイすると、彼は本来ちゃんと桜の兄で、親友の士郎を大事にしていた、と思えます。彼がおかしくなったのはやはり魔術師へのこだわりが大きすぎたのを臆硯に利用されたせいではないでしょうか。慎二が桜へ行っていた仕打ちは鬼畜としかいえませんが、慎二がアレをしなかった場合、桜はさらにつらい目にあっていたかもしれません。慎二と桜は愛し合いながら憎しみ合っているというかなり複雑な関係にあり、HFルートで桜が壊れたのははずみで慎二を殺してしまっただけです。

もしエミヤの生前経験した聖杯戦争を書くとしたら、いつそのこと慎二生存ルートを作ってみるのもおもしろいかも。

第三話 F a t e ルート後 桜の現状（前書き）

独自解釈・捏造設定満載のエログロがある話です。規制にかからぬように気を付けたから、少し短くなりすぎたかもしれません。

第三話 F a t e ルート後 桜の現状

間桐邸は常に薄暗い、どこか怪しい雰囲気がある。遠坂邸も「幽霊屋敷」扱いされているので、衛宮邸の雰囲気を知るまでは魔術師の家はどこでもこんなものだろうと、間桐桜は思い込んでいた。聖杯戦争が終わって約二か月、兄の慎二は行方不明のままだ。しかし、本当はもうこの世にいないことを臓硯から聞いているし、イリヤスフィールからも告白されている。

聖杯戦争が終了してすぐは、桜は慎二の死を知らされて、自分がマスターを押し付けてしまったために兄が死んだのだと、深く落ち込んでいた。そのせいで凜や士郎、藤村大河には特に心配をかけていた。

そんなある日のこと。衛宮邸で士郎が用事で外出した時、たまたま訪れていたイリヤと二人きりになった。

「私がシンジを殺したわ。バーサーカーがひき肉にしたの」

銀髪の幼い少女に、何の前触れもなく、切り出された。

「貴女がライダーの本当のマスターだったことはわかってる。……

あ、リンやシロウは何も知らないわよ？シンジは貴女のことを一生懸命隠してたから」

「……貴女が、兄さんを」

桜の目に、憎悪の炎がともった。

「私の兄さん。……よくも」

「聖杯戦争はそういうものよ？シロウだって、コトミネを殺しているんだから」

「……っ」

魔術師は血の匂いがするもの、そんなことはわかっているつもりだった。しかし、この開放的な衛宮邸にいと、この家の主が魔術師だということを忘れてしまう。

「だから、貴女がシンジの死を背負うこともないでしょう。彼は好きでマスターになったんでしょ？」

「それは」

イリヤの言うとおりだった。間桐家の直系でありながら、慎二には魔術回路がなく、ほぼ一般人だった。

聖杯に願って、魔術師になりたい。聖杯戦争は魔術師同士の闘争だというのに、そんな理由で慎二は代理マスターになってしまったのだ。しかし、慎二の深い苦悩を知る桜には、その思いを馬鹿にすることはできなかった。

「でも、私のせい」

ライダーを慎二に貸し与えたのは、戦いを嫌った桜だ。そんな軽率なことをしなければ、兄は死ななかった。

「違うでしょう？私がシンジを殺したんだから。私を憎めばいい。そのかわり、元気を出して。シロウのために」

「先輩の……？」

「シロウがセイバーを好きだったことは知ってるでしょう？そしてもう二度と会えないことも」

士郎が呼び出したセイバーのサーヴァント。十代半ばの外見の少女騎士で、信じがたいほど清冽な美しさをもっていた。

「リンは特にシロウを好きってわけではないようなんだけど、サクラは違うわよね。好きなんでしょう、シロウを」

「イリヤさんは」

「もちろん好きよ？シロウは私の弟なんだから」

「えー？」

睨みつけるのを忘れてしまい、桜はまじまじとイリヤを見つめた。どう見ても小学生くらいの姿だ。

「身体を調整されているから、成長が遅れているの。あの子は私のことを『妹』と思ってくれているけどね」

そういうイリヤの表情はひどく大人びている。いや、実年齢が士郎より年上なのなら、これで年齢相応なのか。アインツベルンは魔道

の大家だ。もしかしたら、イリヤは桜なみか、あるいはそれ以上の処置をインツベルンで受けているのかもしれない。それに思い当たって桜の表情は凍りついた。

「私は長くは生きられない。リンが身体を見てはくれているけど、ね。シロウにはまだ私の寿命のことは伝えていないけど、あと何か月もすればさすがにばれるでしょうね。ねえ、サクラ」

シロウの重しになって頂戴。イリヤはそう告げた。

「シロウには、守るべき女性ひとが必要な。そういう女性ひとがいないと、あの子はどこか遠くへ行ってしまったまま、戻ってこなくなる。サクラならシロウとお似合いだと思うわ」

桜は元気に明るくふるまうしかなかった。凜や士郎にこれ以上心配はかけられない。イリヤがいなくなってしまうならなおさら、士郎のそばにいないければならないような気もする。自分のような者が彼のそばにいる資格があるかどうか、まだ決心はつかないのだけだ。

その後も衛宮邸でよくイリヤに会う機会があり、彼女の境遇が自分と似ているような気がしたせいもあって、いつのまにか桜はイリヤと仲良しになった。

弓道部の仕事がかかり遅くまでかかってしまいそうだったので、今夜は衛宮邸に寄ることはできない、と昼休みに、屋上で凜と士郎と三人で昼食をとっているときに告げる。……これは半分嘘だ。臍硯からの指示で、たとえ早く部活動が終わっても、今日はまっすぐ帰宅することになっているのだ。

「そうか、桜、副主将なものな」

「やっぱり、秋には綾子のあとをついで主将になるの？」

「……それはまだ、わかりませんけど」

凜と士郎の顔を見ながら、桜は思っていた。

（兄さんはいなくなってしまうたけれど、できたらこのまま、姉さ

んや先輩と、ずっと一緒にいられたら、どんなにいいのかしら)

弓道部はかなり遅くまでかかってしまい、桜は途中まで藤村大河に送ってもらって家路についた。

玄関に入るとすぐ、呼びかけがあった。

「桜」

「おじい様」

目の前にいる、背の低い、杖を突いたやや猫背の老人。彼が間桐臓硯、その人だ。

「来るがよい」

「はい」

臓硯について、陰気な、薄暗い蟲蔵のそばまで歩く。

「桜。儂とお前の食料を用意した。喰らうがよい」

臓硯が、カカカ、と嗤いながら、カツン、と持っている杖で床を叩くと、暗がりの中から二人の若者が現れた。二人とも、熱に浮かされたような、それでいてどこかぼんやりした様子で、ゆっくりと桜に近づく。そして、まるで人形のようにぎこちない動きで、服を脱いでゆく。明らかに正気ではない。桜はわずかに後ずさった。

「桜」

臓硯は優しい声で桜をうながす。桜は一度目を閉じると、自分も服をゆっくりと脱いでいった。

桜には間桐の魔術になじむために刻印虫が埋め込まれている。身体改造がほぼ完全に済んでからは、桜はより多大の魔力を必要とした。そのため、兄の慎二はほぼ一般人だったが、それでも間桐の直系男子、肉体関係を持つことでそれなりに桜に魔力を与えていた。今夜の若者たちは一般人、残念ながらやや物足りない魔力しかもらえなかった。そして、いま彼らは蟲蔵の中にいる。

「ぎゃあああ！！やめてくれっ」

「ひいひいひい」

身体中を蟲に這い回られ、齧られ、その苦痛で二人の若者は正氣を取り戻した。いったい自分たちはどこにいて、どうなってしまったのか、わけがわからない。先ほどまでは、天にも昇るようなこちだった、そう思うのに。まず絶対に口説き落とすことなど不可能の、極上の大和撫子。二人は彼女に夢中になった。二対一なんて趣味ではないはずなのに、こういうわけがおかしいとは思わなかった。

「た、助けてくれ！」

「だ、誰かつ」

悲鳴が次第に、とぎれとぎれになっていく。桜は、蟲蔵のすぐ外で、それを聞いていた。

（誰も、助けてはくれない）

もしかしたら、と少しだけ期待した兄は、臓硯の側に回った。おじい様に逆らえるはず、ない。ずいぶん昔になるが、あの優しかった雁夜叔父さんでさえ簡単に殺されたのだ。

やがて、あの二人は完全に蟲に喰い尽くされ、跡形もなく消えてしまっただろう。

（姉さん。先輩。助けて）

（だめ、来ないで、殺される）

二つの矛盾した思考が桜の脳髓を侵す。

本来、魔術師として大ベテランの間桐臓硯に、遠坂凜も衛宮士郎も勝てる要素などない。但し、聖杯戦争中だったら、あるいは二人は自分を助けることができたかもしれない。なぜなら、彼らは強力なサーヴァントを従えたマスターだったのだから。

（今更、何を夢見ているの。「助けて」なんて言うわけにはいかない。こんな汚れた私を、知られたくない）

もしかしたら、慎二がわざわざあの二人が怒りだすような手段を用いたのは、自分たち兄妹の置かれた異常さを知らせたかったのかもしれない。今となっては、もう確かめようもないことだが、やがて、悲鳴が消え静かになった蟲蔵から、臓硯の声が響いた。

「桜、入るがよい。魔力の調整をする」

「はい」

臓硯に逆らう気などない。ただ、もっと普通の暮らしをしたい、と願ってしまう。いったい何度、これと同じことを繰り返さなければならぬのだろう。

桜は、魔力を受け取った姿のまま、蟲蔵へ向かった。

間桐邸の朝はやはり薄暗い。桜はシャワーを浴び、身支度をする足早に表に出た。これから、いつも通り、大好きな先輩の家に行くのだから、と暗い気持ちを切り替える。すがすがしい朝。鼻歌でも歌いたくなる。……我ながら、薄情だ。昨夜の二人の若者は、たまたま目をつけられてしまっただけの不運な一般人。自分は魔力をもらい、残りの身体は臓硯が喰らった。自分は人殺しの共犯なのだ、と知っている。それでも、決して誰にも悟られぬように、笑顔を作る。我慢するしかない。

衛宮邸の前までたどり着く。玄関に入ろうとすると、そこで掃き掃除をしている見慣れない人物に出くわした。白髪で褐色の肌、黒い服を着た大きな体の男性。彼は桜の存在に気づいたらしく、顔を上げた。灰色の静かな瞳が桜をとらえた。

「おはよう」

「あ、おはようございます」

朝の挨拶を普通にされてしまったので、つい桜も普通に返してしまった。

「この家の主から聞いている。間桐桜さん、でいいのかな」

「あ、はい」

この男性は、いったい誰だろう。そんな桜の気持ちを読み取ったように、自己紹介が来た。

「私はアーチャー。昨夜から妹のイリヤスフィールとともに、ここにお世話になっている。君の知っているイリヤは、私たちのいとこ

にあたる。……イリヤと仲良くしてもらっているようだな。ありがとう」

「イ、イリヤちゃんのいところですか？」

「そういうことになる。衛宮士郎ならまだ眠っていると思う。昨夜少々つきあわせてしまったのね」

アーチャーと名乗った男性は、どうぞ、と桜を促した。

「え、でも」

「君より我々の方が部外者なんだ、遠慮などされたら衛宮士郎がさびしがる」

穏やかな、無邪気にも見える笑みを浮かべている。怪しい人ではない、と思うのだけれど。

イリヤのいところ、なら、アインツベルンの人間なのか。

それに、「アーチャー」って。サーヴァントのクラス名……？

混乱しつづいても通り朝食の準備にかかる桜を、アーチャーが手伝い始めた。

第三話 F a t e ルート後 桜の現状（後書き）

「雁夜叔父さん」は「F a t e / Z e r o」（星海社文庫）で登場します。

間桐雁夜。桜を助けるために第四次聖杯戦争に身を投じます。

別に臓硯に殺されたわけではなくて、力尽き死んだところを、桜の目の前で蟲に喰われてしまいました。

興味のある方は本を読んでみてください。

第四話 F a t e ルート後 なにげない朝、と（前書き）

エミヤの過去の捏造設定入ります。

第四話 F a t e ルート後 なにげない朝、と

ぬいぐるみ等ファンシーな調度品が置かれた豪華な部屋。アインツベルン城のイリヤの部屋だ。士郎とイリヤが向かい合っている。士郎は椅子に縛られている。そのわりに二人は穏やかに話をしている。

「イリヤとバーサーカーって仲がいいんだな」

「聖杯戦争が始まる二か月も前に、召喚したの。バーサーカーは私を守ってくれる。いつも一緒にいてくれるわ。ねえ、シロウ。シロウも私のサーヴァントにならない？」

「……それは無理だ、イリヤ」

イリヤの表情が今にも泣きそうなものに変わる。

「シロウもキリツグと同じなの？一緒にいてくれないの？」

「イリヤ。もしかしてイリヤは……」

士郎が目を開けると、そこは自分の部屋で、布団のなかだった。昨夜は土蔵にいたはずだが、いつの間ここで眠っていたのか。

（それにしても、変な夢だったな。聖杯戦争の時、イリヤに確かに捕まったけど、あんな会話したかな？）

時計を見ると、六時少し前。

「わ、寝過ごした」

もうそろそろ桜が来る時間だ。あわてて着替えを済ませ台所へ向かう。

「お味噌汁は私が作りますから。あ」

「ではこの干物は私が焼いておこう。む」

調理台の前で話をしていた桜とエミヤが、一斉に振り返った。

「先輩、おはようございます」

「おはよう、やっと起きたか」

「……おはよう」

確かに昨夜、結局桜には普通に正面からアーチャーたちを会わせる

ことにしたが、いきなり土郎ぬきで接触するのは考えに入れていなかった。

「アーチャー、俺が桜と一緒に作るから、お前はいいぞ」

「ふむ。ふむふむ」

エミヤはいきなりにやにやと人の悪い笑みを浮かべた。

「何だよ」

「こんなにかわいらしいお嬢さんがいつも来てくれているんだ、他の男と一緒にいさせるのはさぞかし嫌だろうな」

「かわいらしい……」

初々しく頬を赤らめている桜。

「なんつつ恥ずかしいことをいうんだ、お前！」

こちらも照れてしまつて大声で叫ぶ土郎。

「道場の掃除でもしてくる」

爆弾をほつり込んでおいてさつさと退散するエミヤ。

残された二人は微妙な雰囲気で調理を開始した。

晴れた朝は空気がすがすがしい。エミヤは水を汲んだバケツで雑巾を濡らして絞り、道場の拭き掃除を始めた。ほとんど覚えていないのに、やはりここは懐かしい場所だった。心を込めて磨き上げる。ほぼ終わりがけたとき、天使の声が響いた。

「ここでセイバーにしごかれたのね？シロウ」

「イリヤ」

顔を上げると、イリヤ二人が手をつないでそばに立っていた。

「オレの記録を見たんだったな」

大きいイリヤが、ふ、と顔をほころばせる。

「このシロウも同じことしたらしいわよ？」

「必殺技があるか、と聞いて、セイバーをすごく怒らせたそうよ」
小さいイリヤの方はくすくす笑う。

「『必殺技』ね。それ、藤ねえの影響だ、多分」

藤村大河。教師のくせにやたら破天荒なお人だ。弟分の土郎が影響

を受けていないわけがない。彼は普段は真面目なのに意外なところではつちやけたりする。

「アレは伝染するものなんだな」

「他人事みたいに言わないの。貴方もそうでしょう」

「……うん、そうだな」

最後の仕上げにかかるエミヤを、小さいイリヤの方はやや複雑そうな表情で見守る。

「どうしたの」

大きいイリヤの問いに、小さいイリヤは呟くように答える。

「本当にシロウなのね。……あの時、アーチャーは私を一度も狙わなかった。私のこと、覚えていたのね。それなのに、私はバーサーカーに彼を殺させた」

彼はアーチャーのサーヴァントなのだから、マスターのイリヤを狙って一斉射撃でも行えばよかったのだ。バーサーカーがイリヤを庇ってかわりに攻撃をくらい斃される可能性は、剣技でわざわざ挑むよりずっと高かったであろう。それをしなかったのは、ひとえにイリヤを傷つけないため。

「そんなの、アーチャーが何も言わなかったのがいけないのよ。貴女は悪くないわ」

「何か、昨日私がサクラのこと言ったのと、同じね」

「ふふ」

二人は同一人物同士だが、案外仲がいいな、とエミヤは思った。聖杯戦争当時、自分と衛宮士郎が険悪な仲だったのとは大違いだ。

エミヤが聖杯戦争に召喚された目的は、過去の自分を自分自身が殺す、という矛盾により、英霊の座から自分を消すことだった。すでに世界に登録されてしまっている以上まず不可能だが、ほとんどあるかどうか分からない可能性に賭けなくなるほど、抑止の守護者カウンターガーディアンの仕事はつらかったのである。しかし、自分のマスターが遠坂凛であることを知り、まず彼女の生存を最優先にすることにした。やが

て、遠坂凜と衛宮士郎の関係がかつて自分が生きていた時と微妙に違うことに気付いた。自分の時は、かなり早い段階で共闘関係を結んだのに、彼らは違っていた。そして、間桐桜と衛宮士郎の関係もやはり違っていて、二人は恋人同士になった。多くの人が死んでいたのに、衛宮士郎は、「桜の味方になる」と告げた。かつての自分だったら、あくまでも桜は妹分だったし、おそらく出来もしないのに「冬木の人も桜もどちらも守る」と言っただろう。そして、あの世界の衛宮士郎は桜の味方であることを優先しながら、なおかつ大聖杯の破壊を目指した。結局イリヤに助けられていたが……。

結局、あらゆる世界でいま生きている衛宮士郎たちは、英霊エミヤになる可能性はあっても、現時点では違う存在だということだ。イリヤに回収されたことで、イリヤはエミヤの記録を垣間見、それを更にエミヤが感じ取り、と、そのおかげで守護者としての膨大な殺戮の記録に埋もれかけていた生前の記録がかなり戻っている。自分は理想に向かって走り続けたことに満足して死んだのであり、今更それを取り消す必要などないことを、思い出せた。全く問題の解決にはならないが、衛宮士郎に対する意味のない殺意は消すことができた。ただ、英霊の座にこの答えを持ち帰ることのできる可能性はほとんどない。今の自分はサーヴァント、聖杯システムによって「アーチャー」の筐^{はこ}に納められ、英霊本体の人格を与えられたコピーなのだ。世界に召喚される時は本体そのものなので、「記録」が確実にあり、そのせいでいつも苦悩しているのだが。

「今朝は桜ちゃんと士郎の合作だね！」

大河は、うんうん、と頷きながらにこにこして炊き立てのご飯を頬張る。テーブルの上には、他に、ほこほこ煮えた肉じゃが、アジの干物、ほうれんそうのお浸し、ナスとみょうがの味噌汁、と、和風の料理が並んでいる。

「うん、結構いけるではないか」

「偉そうに言うなよ、アーチャー」

エミヤの何気ない感想に士郎が突っかかっているが、意外に二人とも口元がほころんでいたりする。

「おはようございます、遠坂先輩」

「おはよう、ぎゅーにゅー……」

ふらふらと、今にも倒れそうな風情で遅れてやってきた黒髪の少女は、桜からグラスに注がれた牛乳を受け取り、ぐいぐいと一気飲みをする。

「シロウとサクラの料理はおいしいわね」

「同感」

二人のイリヤもにこにこ朝食をとっている。

「ああ、そういえば貴方たち、自己紹介したの？」

牛乳のおかげで目がはつきりと覚めた凜は、大きなイリヤとエミヤをちらちらと見る。

「ああ、先ほどな」

「一応ね」

相変わらずこのお客たちはマイペースだ。おいしそうに様々なおかずに手を出している。

「お二人とも、お箸を上手にお使いになるんですね」

桜の問いに、大きいイリヤの方が答える。

「ああ、こう見えても、私たち、日本人の血が入ってるから」

「え、ほんと？ そういえばアーチャーさんの顔、東洋系っぽい！」

大河はご飯から目を上げて、二人をしげしげと見直す。

（こいつ、実は純粋な日本人なんだけどな）

元俺とは思えないよなあ。やたらガタイいいし。そう思いながら、士郎はエミヤの顔を見る。

「なんだ」

「……なんでもない」

「学校があるのにいいのか、こんなのにびりしていて」

「うるせえ」

実際、急いで出かける必要があるのは教師である大河と弓道部の朝練がある桜だけだ。しかし、せっかくみんな一緒なのだから、と士郎は桜や凧とともに登校する気である。

「ねえ、アーチャー、あとでお散歩しましょ」

小さいイリヤはエミヤにっこりと笑いかける。

「……まあ別にかまわんが。衛宮士郎、なんなら食後の後片付けは私がしておこう」

「いいのか？」

「慣れているからな」

しばらくお世話になることだし、と言いながらエミヤの目はきらきらと輝いている。

「あの、アーチャーさんって家事、好きなんですか？」

桜はエミヤの表情に驚いて目を見開いている。家事が得意なのは士郎もそうだが、彼はそれ以上のように見える。

「いや、特に好き、というわけでは」

「全然説得力ないわよ、アーチャー？」

凧はくすくすと笑いだした。

（こいつが当分いるなら、紅茶の葉、少し家から持ってこようかしら。アーチャーの入れる紅茶、最高なもの）

朝食が終わると、弾丸のように大河が飛び出していく。片づけはエミヤに任せて、士郎と凧は登校の支度をし、桜とともに家を出た。

「アーチャーさんって、意外に面白そうな人ですね。あんなに楽しそうに片付けする人って初めて見ました」

桜はエミヤの意外に豊かな表情を思い出している。

「仕事がとても大変らしいんだ。家事がいい息抜きになっているんじゃないか？」

士郎はエミヤの心理を推測する。サーヴァントだから守護者の仕事はしなくていいし、今は聖杯戦争もない。これで桜の心配さえなければ、彼にとってはお姉さんと一緒に物見遊山でもしているような

ものだろう。家事だつてもとは必要だからやっていたに過ぎないだろうが、そんな普通のことか久しぶりで嬉しいのだろう、と思う。

それにしても、間桐臓硯への対策は結局士郎が否定した、「アーチャーを囷にして正面突破作戦」になりそうだ。臓硯の本体の居場所とやらがはつきりしないので、相手を誘い出すしかないらしい。

「イリヤもあいつのこと気に入ってるみたいね」

「うーん」

凜の指摘に思わず士郎は苦笑いする。バーサーカーにアーチャーを殺させたのはイリヤなのに、彼の正体を知ってしまったせいか、あの大きいイリヤと同じに彼を甘やかしそうな気がする。

（それにしても、聖杯戦争中と今と、なんでこんなに態度が違うんだろうな、アーチャーの奴）

聖杯戦争中、一応同盟関係を結んでいたのに、アーチャーからは常に殺気を帯びた敵意をぶつけられており、それでいてやたら的確なアドバイスをくれたり、しまいいは命と引き換えに自分たちを救ってくれたり、と矛盾だらけでわけのわからない奴だった。

今、ここにいるエミヤはあの時のアーチャーとは厳密には違うが、同じ存在だ。それなのに士郎に対して出会った時から態度が基本的に穏やかなのだ。聖杯戦争中だったからこそ、あえて敵視していたのかもしれない、とも考えたが、それだけでもないような気がする。（後でじっくり聞いてみよう）

掃除・洗濯を済ませると、エミヤは大きいイリヤと小さいイリヤに挟まれて衛宮邸を出た。もちろん（？）三人は手をつないでいる。どこから見ても仲良しきようだい、である。

「ふふ。シロウと一緒に」

「お散歩、ね。どこに行くんだ？」

もうじき十時ごろだろうか。学生らしい者はこの時間、歩いていない。この辺りは日本家屋が立ち並ぶ閑静な住宅街で、時たますれ違

うのは年配の人がほとんどだ。どう見ても外国人にしか見えない三人をちらりとうかがって通り過ぎていく。さしてじろじろ見られたりしないのは、この冬木の地には昔から外国人が移り住んでいたからだろう。あの遠坂凜もクォーターで、黒髪なのに目は蒼い。

「あちらの方がマトウの屋敷ね」

ふいに大きいイリヤが左手前方を指差した。まだ地元の商店街にもたどり着いていないので、さらに先にあるであろうそこは見えるはずもない。

「まさかいまからあそこに行く、と？」

「いいえ。ただちょっと気になったことがあって。シロウ、なぜシンジのことをちゃんと話さなかったの？」

「どういう意味だね」

「シンジがサクラに何をしたか、全然話さなかったこと？でもわざわざ教えてどうするの」

小さいイリヤは首をかしげた。慎二が桜に手をあげるようになっていたことからして、あの兄妹に何かが起きていたことは推察できる。単純な喧嘩などではないのだろう。おそらくエミヤと大きいイリヤはもっと深い何かを知ってしまっている。でも、それを凜や士郎に教える意味はあるのか。

「シロウの昨日の言い方だと、まるでシンジが心情的にずっとサクラの味方だったみたいじゃない。シンジがサクラを人質にとったり、サクラの身体の中の蟲を活性化させたりしたことをなんで言わなかったの」

「ああ、ここの慎二はそこまでではやらなかったし、あくまで桜を巻き込まないようにしていたようだから。別の世界の慎二がやらかしたことをここの凜たちに教える必要はない、と判断した」

「たぶん、シンジはサクラを犯していたはずよ。ここのシンジもそれは同じだったと思うけど」

「……イリヤ。そんなこと、言えるわけないだろ」

エミヤは眉をひそめた。極めてデリケートな問題なのだ。

「おそらく臓硯が、慎二が桜に手を出すように仕向けたんだろう。あの二人は、別に仲は悪くなかったんだ。それなのに」

「それ、生前の貴方の記憶？」

「……ああ、そうだ」

はつきり覚えているわけではない。だが、その記憶があるからこそ、慎二が桜にどんなことをしても、憎めなかった。

自動販売機でお茶を買ってから、商店街の中の小さな公園に入る。

ここは聖杯戦争中よく士郎とイリヤが話をした場所だ。三人並んでベンチに腰掛ける。

「なつかしいわね」

大きいイリヤは感慨深げにブランコや滑り台のある、何の変哲もない公園の中を見渡した。

「このお茶、あまりおいしくないわ」

小さいイリヤの方は、買ったお茶の味に文句を言っている。エミヤは、ふと生前の記憶を呼び起こされた。

ローレライを好んで歌い、よくこの公園の中をくると舞っていた、小さい銀髪の少女。時々ここで、焼き立ての大判焼きを二人して食べたりした。聖杯戦争が終わって多分一年後くらいだったか、それまでは行こうともしなかった切嗣の墓参りに、もう歩けなくなっていた彼女を負ぶって出かけた。彼女が寿命で亡くなるのは当の昔に覚悟していたが、それ以上に、残酷なことが。

「『シロウ』」

名を呼ばれて顔を上げると、二人のイリヤが両側からエミヤの顔をいたわるように覗き込んでいた。

大きいイリヤはそっとエミヤの頭をなで、小さいイリヤは、いきなりエミヤの膝に頭をのせて寝ころんだ。

「……」

えーと。心が読めるのかこの二人。エミヤは思い切り照れてしまう。多分顔が少しばかり赤くなっているだろう。

「ねえ、そろそろ新都に行ってみる？お昼ご飯はこの際外食でもいいわよね」

お金なら持つてきたわ、と小さなイリヤは勢いよくベンチから身を起こした。

「アーチャー、私のことで何か知っていることがあるなら、シロウに教えておいて。あの子を、悲しませたくない」

「……っ」

ここは自分の過去ではない。しかし極めて似通っている世界である以上、同じ展開になってしまう可能性は十分にある。

「もちろん話すつもりはあるが、どう対処したらいいのかな」

「あら、簡単なことよ。皆で考えればいいでしょう」

エミヤが何を思い出していたのか見当をつけている大きいイリヤは、につこりと微笑んだ。

第四話 Fateルート後 なにげない朝、と（後書き）

「Fate/complette material III World material」（発行：エンターブレイン）012ページに、『英霊とサーヴァントの違い』というコーナーがあります。今回の話にある、英霊本体を召喚できるのは「世界」のみでサーヴァントは英霊本体の情報を使って作られた「分身」、コピーである、というのはその記述に従っています。

アーチャーの生前の聖杯戦争はどんなものが、妄想してみる。

大筋はFateルートであろうが、

1・イリヤとバーサーカーの深い絆をよく知っている可能性がある。共闘したことがあるか、イリヤに捕まった時におしゃべりでもして知ったか（根拠は薄い）、HFルートでバーサーカーを見捨てることになった時のアーチャーの反応が……）

2・イリヤは戦争中ないしその後、士郎が「守り切れずに」殺された可能性がある（やはりHFルートで、イリヤか士郎かどちらかしか生き残れないようなことをイリヤが口に出している。アーチャーが「済まなそうに」イリヤを見た、というところもあり、士郎の代わりにイリヤが犠牲になったニュアンスを感じる。おまけにイリヤを守る時のアーチャーの奮戦ぶりがすごい）

3・イリヤと自分の関係についてやたら詳しい（聖杯戦争中、あるいは戦後イリヤとよく話し合っている）

4・いつそのこと「慎二生存ルート」にしてしまえ！ライダーが消えた後、慎二がイリヤとバーサーカーに殺されそうになるのを止めて、自宅に保護してしまう。慎二が死んだら桜が悲しむ。もともと間桐兄妹の仲は悪くなかった。それがおかしくなったのは……。凜に役立たず扱いされる慎二は、かえって開き直って、士郎のためにその頭脳を駆使する。セイバーの魔力の問題解決、凜は乙女なので

ぎりぎりまで言えなかったが、慎二なら遠慮なく切り出し、土郎とセイバーを早めに結び付けそうだ。ただ、戦争が終わった後、桜と慎二は（二人は多分仲直りする）臓硯にさらに虐待されるのかも。

第五話 F a t e ルート後 穏やかな日（前書き）

今回も基本ほのぼのです。

第五話 F a t e ルート後 穏やかな日

昼休みの生徒会室で、士郎と生徒会長の柳洞一成は弁当を広げた。いまはここに二人しかない。教室で普通に弁当を食べようとすると、どういうわけかクラスメートに食べられてしまう（士郎の弁当がおいしいからなのだが）ので、ここに避難させてもらうことが多い。

「衛宮。お前、いつまであの女狐と行動を共にする気だ。間桐嬢ならともかく、あの女はいかん」

いつも通り（？）鶏のから揚げなど動物性蛋白質のおかずを士郎から貰いながら、一成が切り出した。

「女狐って」

まあ、確かに遠坂は表と裏の顔が違いすぎるが……「あかいあくま」だし、と思いつながら、士郎は反論した。

「遠坂って、結構いい奴だぞ」

「お前は騙されている！」

「そんなことないぞ。あいつには大きな借りもある」

そう、本当に大きな借りがある。魔術回路を開くのに使った宝石もそうだが、なんといつても。

（命の恩人だったんだものな）

聖杯戦争にただ巻き込まれただけの人間など、たいていの魔術師ならば見殺しにしている。ただ、遠坂凜は、「心の贅肉」すなわち一般人的な感覚をも持ち合わせており、自分には何の得にもならないのに、士郎の命を助けたのだ。

「大きな借り……借金でもしているのか？」

「まあ、そんなとこかな」

むむむ……と唸る一成をしり目に、士郎は自分の弁当をせっせとかきこむ。

「遠坂のことは心配してくれなくても大丈夫だ」

「それならいいが……」

「将来お寺に入る奴が偏見を持つのはよくないと思うぞ」

「ううむ。面目もない」

空の弁当箱を抱え、士郎は生徒会室を後にした。廊下に出たところで、ばったりと、肩までの茶色い髪、見慣れた男前な印象の女生徒に出くわした。弓道部の部長、美綴綾子。士郎は元弓道部員だったこともあり、比較的彼女とは親しいほうである。

「衛宮」

「美綴か。一成なら、いま書類が何か見てるぞ」

「違うつて。あんたを探してたんだ。ここじゃないかと思ってね」

「弓道部に戻れ、というのなら断る」

先日、入学式のあと、新入部員の歓迎会に、イリヤを連れて飛び入り参加したが、別に部に戻るつもりでしたことではない。

「いや、もう正式に戻れとは言わない。時々でいいから、指導を手伝ってほしいんだ。……あいつがいなくなってしまつて、男子の方がどうしても手薄になつてる」

「慎二、か。あいつがいらないとやはり……」

「あんなんでも男子のエースだったからねえ。全くどこに行つちまつたんだか……ごめん」

暗い顔になつた士郎に、ぶんぶんと手を振つて綾子は謝る。行方不明になつてしまつている元副部長の間桐慎二は、あまり人付き合いのいいとは言えない士郎をあちこちによく連れまわしていたりして、ある時期まではたから見ても二人はとても仲が良かったのだ。

「……少し考えさせてくれ」

「頼むよ」

ところで、と急に綾子はにやにやと笑いながら、

「遠坂とつきあつてるの？」

と爆弾発言をかましてくれた。

「ち、違う！遠坂とは、そんなんじゃない」

「顔が赤いよ」

「だから、本当に違うんだって。大体、そんなこと言われたら、遠坂の奴が迷惑すると思うぞ」

「まあ、間桐もいるしね？」

「桜は妹みたいなものだって！」

「ますます顔を赤くして叫びだす士郎を見て、綾子はけらけらと笑い出した。」

「悪い悪い。そうすると、遠坂との賭けの行方はまだわからないな」

「へ？」

「いや、こつちのこと。じゃあ、いい返事を待ってるよ」

目を丸くした士郎を放っておいて、さっさと綾子は去って行った。

「全く……」

なんで俺の周りには私の強い女性ばかりいるんだろう、そんなことを思いながら、士郎は三年C組の教室に戻っていった。

弓道場の隅で、桜と凜は弁当を広げた。彼女たちと士郎の弁当の内容が一致しているので、それをもし周囲に知られたらいろいろ大変なことになりそうだ。

「どうでもいいけど、桜ってよく食べるわね」

「う……いいじゃないですか、運動部なんですから。前に弁当の追加用におにぎりを作っていて先輩にばれてしまってから、もうごまかさないことにしたんですっ」

桜は、上品に弁当を食べ始めた凜を見つめながら、ぱくぱくと食べ始めた。凜が聖杯戦争を機に士郎と親しくなってしまったているのは、正直腹立たしいところもある。ただ、学園では「ミス・パーフェクト」といわれるほどの完璧な優等生の凜が、衛宮邸ではごく自然に活発に振る舞っている。そんな彼女を見ると、遠い昔に遠坂の家で共に過ごした頃を思い出し、心が温まるのも確かだった。

「そつえば、綾子はどうしたのかしら」

「用事があるから遅れるって、言っていましたけど」

「ふうん。お昼より大事な用事、ね」

考え込みながらゆっくり食べている凧と比較的早く食べる桜は、弁当の量に差があってもほぼ同時に食べ終わった。お茶を入れているところへ、綾子がやってきた。

「綾子、遅かったわね。私たち、もう終わったんだけど」

「あんたらが早すぎるんだ……と、間桐、あんたからも衛宮に頼んでほしいことがあるんだけどさ」

「はい？」

「一応本人には言ったんだけど、『部に戻らなくてもいいから、時々指導を手伝ってほしい』って、間桐からも言って貰えないかな」

「それは構いませんけど、先輩に無理強いはできません」

うつむきながらも、桜ははつきりと口にした。

「衛宮くんの弓って、そんなに上手なの？桜のは見たことあるけど綾子にもお茶を入れながら、凧は目を瞬かせた。

「上手いなんてものじゃない。衛宮の射は……化け物だね」

「化け物って……。先輩の射はきれいです」

二人の弓道部員は口々に士郎の弓の腕をほめそやした。

（それで弓兵、^{アーチャー}なのか）

凧はやっとエミヤのクラスを納得できた。単に今回の聖杯戦争で弓を使わなかっただけなのだろう。

「ただね、衛宮の奴、自分の射は『邪道』だっていうんだよね。まあ、言いたいことはわかるんだけど、あれだけの腕があつてやめるのはもったいないと思うんだ。将来また再開してくれると嬉しいな」綾子は自分の弁当を広げ、食べ始める。

「『邪道』？どういう意味かしら」

「遠坂先輩、弓道に精神修養の意味があるのはお判りですか？」

「なんとなくはね」

「先輩の場合、初めから矢が中るのが決まっちゃっているんです。常にイメージ通りに完璧に身体を制御してしまえる。それを目指すためにひたすら雑念を払い集中するのが弓道ですから、先輩の場合

はその次元はとつくに超えてしまっていて、ええと、あまりうまく言えなくてすみません」

桜はちよつと首をすくめる。

「つまり、あいつは初めから弓道の目指す終着点にいる？」

「もしくは、全くアプローチが違うのかもしれないが、どちらにせよ、先輩の射は本当にきれいなんですっ」

（桜、そこで握り拳で力説しなくても。バーサーカー戦で士郎は弓を引いていたけど、腕がいいかどうかなんて気にしてる余裕なかったしねえ）

凜は微笑みながら桜を見つめた。

お昼少し前。二人のイリヤとエミヤは、新都にあるショッピングモール、ヴェルデに来ていた。たくさんの店が並んでいる。とある店の前で立ち止まる。

「シロウ、ここ見ていきましょう」

「かわいいのがたくさんあるの」

「……ぬいぐるみか」

生前イリヤとここに来たことがあったような、いや、セイバーもだったかな？ 懐かしい気はするが困ったな、と冷や汗をかくエミヤ。

ファンシーショップなど、好んで大の男が入りたいところではない、多分。しかし。

「はやく、ね？」

「行きましょ」

イリヤたちに両側から手を引かれてしまつては、断れない。三人仲良く手をつないで店に入る。中にいたほかの客が注目している。

「なんだか目立っているんだが」

「貴方が『両手に花』してるからでしょう？」

「ふふ、ぬいぐるみもかわいいけど、シロウもかわいいわ！」

どう見ても年下にしか見えない少女たちに「かわいい」よばわりされる大男。そんなシニールでカオスな会話を聞いてしまったそばの

人たちはちらちらとエミヤとイリヤたちを見比べる。どうみても兄妹に見えるが、会話が妙に逆転してるような……？

「イリヤはどんなのが好きなのかね」

「ウサギとか、クマとか、あ、トラもある。タイガが喜びそう」

「シロウはどんなのがいいの」

「ネコとか」

「「私ネコ嫌い」」

「なんでさ」

凜もそうだがイリヤもネコっぽい気がするんだが、似ているからかえって嫌いなんだろうか。結構くだらないことを考えてしまうエミヤであった。

「私この間シロウとここにきて買ったから、今日はウィンドウショッピングね」

小さいイリヤはにこにこしている。大きいイリヤは意味ありげに笑う。

「ここで買うのは私もやめておくわ。シロウ、ネコ以外なら買ってもいいわよ」

「いらん」

大体小さいイリヤしか現金を持っていないし、無駄遣いは避けたい。というかぬいぐるみは要らない。

「冗談よ」

「それよりそろそろお昼にしない？」

「ファミレスにでも入るか？」

「牛丼屋は？」

「ラーメン屋は？」

「本気ならそれでも構わないが、どうする？」

「喫茶店とかでもおいしいランチがあるかもしれないわ。シロウって紅茶好きなんでしょう？リンに聞いたわよ」

仲良くおしゃべりをしながら、三人は店内のぬいぐるみを見て回った。なんだか懐かしいライオンのぬいぐるみもある。

「そういえば、確かシロウがライオン持ってたわね」

「多分、セイバーのだろう」

この士郎はセイバーが好きだったようだから、デートでもした時に買ったのだろう。そういえば、確か自分もセイバーに買ったことがあるような気がするな、とエミヤは定かではない記憶をたどる。いくら生前の記憶が戻ってきているといっても、さすがに高校生だった頃では、忘れていることが多い。

「こんなことができるのも今のうちだけよ」

ふいに、大きいイリヤが呟いた。

「帰ったら、シロウやリンにまた話さなきゃならないことができたし、ゾウケンにも多分もう貴方たちのこと気づかれただろうし、忙しくなりそうね」

小さいイリヤも真面目な表情になる。

「まあ、昼間から動かないとは思うが。昼食をとって公園でも散歩しながらゆっくり戻ろう。……そういえば夕食の献立はどうしたらいいんだろう」

「それはシロウに任せるべきでしょ、アーチャー」

本当にシロウなのね、こんな時に家事のこと気にするなんて、と小さなイリヤはくすくす笑う。

職員室で、藤村大河教諭は士郎と桜共同作のおいしい弁当をせっせと平らげている。昼休みは、教師にとっては決して長くない。授業の準備やなにかをしているとあつという間に終わってしまうのだ。いつも明るい彼女には珍しく、表情はやや暗く、考え事をしている。（士郎たち、絶対何か隠している）

切嗣の知り合いだというセイバーが来ていた時もそうだったが、イリヤのいとこたちが来た今回も、士郎たちの様子がどこか変なのだ。（まあ、切嗣さんにもそんなところがあったけど。何事もなければいいんだけどね）

士郎の養父の切嗣が普通の人と違うことには気づいていた。おそら

く、士郎や凜も切嗣と同じように、普通ではないのかもしれない。そして、多分近々何かが起ころうとしている。しかし、そこまで気づいていてもあくまで自然に士郎たちに接することに決める、大河には案外そんな思慮深いところがある。彼女の実家は侠客というかヤのつく稼業なので、その影響かもしれない。

「あ、急がなきゃ」

時計を見て、大河は慌てて次の授業の準備にとりかかった。

結局二人のイリヤとエミヤは適当な喫茶店でランチをとった後、近くを散策した。そして、ここにたどり着いてしまった。冬木中央公園。きれいに整地され樹木も植えられているが、人影は少ない。

十年前、第四次聖杯戦争終結時に起きた大火災の跡地で、もとは冬木市民会館を含む住宅街の一角だったのだ。あいかわらずここは死者の怨念が凝り固まった場所だ、とエミヤは思った。ここはどこにかつて本当の両親と住んでいた家があったはずだが、さすがにもう両親の顔も、自宅のあった場所も、覚えていない。高校生の衛宮士郎ならば、まだ覚えているかもしれないが。

「大聖杯をなんとかすれば、こここの怨念も消えるかもしれないわよ？」

大きいイリヤはあっけらかんとしている。

「『この世^{アンリマユ}全ての悪』が消滅すればいいのよね」

小さいイリヤも頷いている。

「まあ、なんとかするしかないか。アレを繰り返すわけにはいかな
い」

エミヤも、十年前の悲劇、自分にとってははるか昔のことだが、絶対にそれを繰り返させまい、そして並行世界で桜に起きてしまった事態をここでは起こさせまい、と心に誓った。

授業が終わると、士郎は校内からコペンハーゲンに電話をし、「所用で当分バイトに行けない」と伝えた。ちなみに士郎は携帯電話を

持っていないので、公衆電話で掛けている。

（さて、急いで買い物に行かないと。今夜は桜もくるだろうし、いっそ鍋にでもするべきか？）

思考内容はまさに主夫、まだ高校生なのに、これでいいのだろうか。自問自答してしまふ。

（それにしても）

正直に言つて、まだ、桜に起きていることを、士郎は信じきれずにいる。もう一人のイリヤやエミヤが偽りを言う理由などないのは十分わかつているのに、それでも。いつも穏やかな笑顔を見せている桜が、間桐の家でそんなひどい目に合っているなんて、しかも慎二もそれを知っていたなんて。

（魔術師としては、臓硯の行動は全然おかしくない、許容範囲なんだった、アーチャーの野郎は言つてやがった）

もつとも、エミヤは当然臓硯の行動を認めているわけではない。真つ先に臓硯の「駆除」を提案したのは彼だ。しかも匣を自分が引き受け、「切り札」を士郎に使わせるつもりでいる。「無限の剣製」アンリミテッドワークスを見せ、しかもある意味新作の宝具まで教えてくれた。士郎には固有結界を使うことは当然できないが、単品の投影ならばできる。臓硯は老獪な魔術師だから、裏をかなければ桜を助けるのは難しい、ということだ。

商店街に向かいながら、今夜の献立を懸命に考える。

（鍋といつてもいろいろあるしな。ロールキャベツでも入れるか、それとも普通に白身の魚をメインにすべきか、ううむ）

「あー、シロウ！おかえりなさい！」

ぼーん。いきなり胸元に衝撃を受け、士郎はよろめいた。

「イリヤ」

よいしょ、と飛び込んできた小さな姉を抱き上げる。イリヤの後ろからは、ゆつくりとエミヤと大きいイリヤが歩いてきた。

「アーチャー、何やってたんだよ」

「散歩だ」

「新都でご飯食べて、公園に行つて、水族館にも行つたのよ」

新都から大橋を渡つて帰つてくる途中に、アベックや家族連れでにぎわう冬木海浜公園がある。水族館はそのなかにあるのだ。中央公園で少しばかり気分が沈んでしまったので、気分転換といったところか。

「まあ、結構楽しかったな」

そういうエミヤの顔を、土郎は思わずまじまじと見つめた。

「何だね、いったい」

「いや、別に」

「？」

自分で気が付いていないんだろうな、本当に楽しそうに笑つてやがる。

「夕食の買い出しなら、手伝おうか。荷物持ちくらいできるぞ」

「じゃあ、皆で行こうか。鍋にしようかと思うんだけど、イリヤはどうだ？」

「お鍋？何入れるの」

「これから決めるんだ」

「白菜にネギに春菊に」

「いや、それも入りたいけど、メインはどうする？」

衛宮家の一行はわいわい騒ぎながら歩き出す。

今夜の夕食はきつと楽しいものになる。そして。

桜の救出作戦、いよいよ開始直前だ。

第五話 F a t e ルート後 穏やかな日（後書き）

アーチャー（や衛宮士郎）がネコ好きなのは「F a t e / h o l l o w a t a r a x i a」をプレイすればわかります。彼は小さくてかわいい生き物はみんな好きなんじゃないかな。だからイリヤのことも好き……？とりあえず「F a t e / h o l l o w a t a r a x i a」のプールのシーンをみると、「士郎ってまさかロリコン？」と疑いたくなります。だって、イリヤの水着に一番ドキドキするってどうなんだろう？

第六話 F a t e ルート後 エミヤの告白（前書き）

またまたエミヤの捏造過去設定、入ります。

第六話 F a t e ルート後 エミヤの告白

衛宮邸の夕食は、今夜は昨夜のメンバーに桜も加わって、ひときわにぎやかだ。

「わー、お鍋だ！うーん、嬉しいよう」

「藤ねえ、そこで嬉し涙流すほどか？」

「メインは豆腐と白身の魚……タラかしら？昨日とうってかわってさっぱりしてる」

「先輩の料理はおいしいです！」

「汁が煮詰まってきたような気がするが」

「鍋奉行しないでいいからアーチャーも食べなさいよ」

「みんなで食べるとおいしいわね」

居間のテーブルの上にカセットコンロを置いて、だし汁の入った鍋を置き、下ごしらえ済みの具を皿に並べ、士郎やエミヤが投入していくが、頃合いよく煮あがったものをほかのメンバーが平らげてゆく……特に大河と桜が。

「うわあ……」

あまりの減り具合に焦る士郎。鍋の具、足りるんだろうか？

「そろそろうどんでも入れるかね？」

皆の食の進み具合を冷静に観察していたエミヤが士郎に確認をとる。

「いや、もうちょつとしたら、かな」

「ふむ」

顎に手をやってエミヤが頷いたとき、ふと気が付くと隣の大きいイリヤが、エミヤの取り鉢に具を一通り取り分けていた。

「イリヤ」

「貴方も食べなさい」

「ああ。ありがとう」

エミヤは目を瞬かせ、それからゆっくりと食べ始める。

士郎

と凜に凝視されているのをきれいにスルーして。

「イリヤさん、お兄さんに優しいね」

大河はうんうんと頷きながら、士郎についてもらったご飯を頼張っている。

「なんか過保護」

小さいイリヤはもう一人の自分にささやく。

「仕方ないでしょ。こうでもしないと遠慮しちゃうんだから」

大きいイリヤは柔らかく微笑む。エミヤは自分がすでに死んだ身でサーヴァントだ、と意識しすぎるところがある。実際受肉していなければ、食事を断る可能性さえあった。

「すみません、私、食べすぎたんでしょうか」

鍋の中身を減らすのに大いに貢献した自覚のある桜が、申し訳なさそうにエミヤを見た。

「なに、若いうちは食べた方がいい。成長期のダイエットは身体を壊すもとだろう?」

「アーチャー、そこでどうして私を見るのかしら」

「凜、君はもう少し食べた方がいい。適度の皮下脂肪がないと女性らしさが」

「アーチャー、それってセクハラ発言だと思うぞ」

(遠坂の奴をからかうのはあいかわらずか、こいつ)

そう思いながらも士郎はエミヤに忠告するが、エミヤは知らん顔を決め込んで鍋を味わっている。

「アーチャーさん、私は?」

「藤ねえは大人だろ、ダイエットしたけりゃ好きにしたら」

「いや、貴女はそのままがいい」

エミヤは真摯な瞳で大河を見つめる。

「え、えええっ! く、口説かれてるの? 私」

大河はやや顔を赤らめた。エミヤは目をぱちくりさせる。

「……そんなつもりはないのだが」

士郎も率直に感想を述べる。

「藤ねえは結構バランスいい体型してるもんな」

二人のエミヤはただ思ってたまを口にしていただけなのだが、なかなか破壊力がある台詞である。

「はあ。こいつら揃って鈍すぎよ」

凜は額を抑えてうめいた。二人のイリヤと桜はくすくす笑い出した。しばらくしてから、士郎が皆に声をかけた。

「そろそろうどん入れるぞー」

「あー、うどんも食べる！」

「藤ねえ……」

うどんとご飯両方を食べたのはやはり大河と桜の二人である。

「サクラ、本当によく食べるわねえ」

「きつとタイガの影響ね」

「うう、イリヤちゃんたちまで」

二人のイリヤにまで大食いを指摘されてしまった桜はテーブルに突っ伏した。

食事のあとしばらく皆でおしゃべりした後、大河は愛用のバイクに乗って自宅に戻っていった。

「ねえ、サクラ、今夜はここに泊まっていきなさいよ」

小さいイリヤが切り出した。

「あの、でも」

「いいじゃない、ね？」

大きいイリヤもにこにこしている。

「えっと、あ、遠坂先輩は？」

「桜が泊まるなら私も泊まるわ」

凜の笑顔を見て、桜は衛宮邸に泊まることに決めた。

（今日はおじい様から何も言われていないし）

「じゃあ、おじゃまします」

桜は士郎に向かって、穏やかな笑みを浮かべて見せた。ちなみにこのときエミヤは夕食の後片付けをしている。主夫英霊、大活躍であ

る。

「衛宮士郎。イリヤのことで重要な話がある」

居間に戻ってきたエミヤは士郎の前に座ると、真面目な表情で切り出した。

「あ、じゃあ私は席を外します」

桜が席を立とうとすると、小さなイリヤが引き留めた。

「私のことなんだから、サクラも聞いて」

「でも」

「お願いね」

桜が座り直す。エミヤは一度目を閉じてから、また目を開けて、その場にいる者たちをゆっくりと見渡す。

「イリヤは今凜に身体を見てもらっているが、それがどういうことなのか、わかっているか？」

「え」

士郎は声を詰まらせる。イリヤが聖杯だったことに関係があるに決まっているが、桜の前で話せるのか。

「……桜のことなら気にする必要はない。彼女は間桐の魔術師だ、一般人ではない」

「おい！」

「慎二が一般人であつた以上、残つたもう一人が魔術師であることは自明の理だろうに。もつとも、彼女は聖杯戦争に参加していないから、私の顔も知らなかったわけだが」

桜の顔色は一気に蒼白になった。

「アーチャー！」

「そんなに大声を出さずとも聞こえているよ、凜」

エミヤは首をちよつとすくめて見せてから、震えだした桜に目を向けた。

「魔術師だということをここで隠す必要はないだろう？衛宮士郎とより親しくなりたいのなら、その程度は明かしておくべきだと思う

のだがね、桜」

「俺も桜に魔術師だって打ち明けていなかったんだから……ごめんな、桜」

やっとエミヤの意図を理解した士郎が、桜に向かって頭を下げた。そう、これから自分たちは、間桐臓硯を排除する予定がある。問題はそのあとだ。桜が間桐家を再興するか、遠坂家に戻るか、などなど親身に相談に乗る必要があるのに、確かに「魔術師であること」を隠す意味はないのだ。

「そんな、謝らないでください。私、先輩を騙してたんですよ？遠坂先輩はもともと知っているし、イリヤちゃんにも気づかれたけど」「それなら余計、俺を仲間外れにしないでほしいな、桜」

士郎は苦笑した。桜は黙って耐えることしか知らない、優しい女の子だ。もともと臓硯の指示で近づいたということに後ろめたさを感じているのだろうが、その結果家族同様の付き合いができているのだから、気にすることはないのにな。

士郎と桜がお互いに見つめあっていると、

「さて、本題にもどるぞ」

エミヤはさっさと話を再開した。

「第五次聖杯戦争は、本来第四次の六十年後に行われるはずだった。イリヤはその時に最高の性能を発揮する『聖杯』になるように調整されていた。しかし、聖杯戦争の時期が大幅に繰り上がったせいで、さらにアインツベルンに無理な調整をされ、その結果が、今だ」

「……どういう意味だよ」

「もうわかっていないのだろうか？イリヤの寿命は残り少ない。本来あと五十年は生きられたはずなのにな。長くてもせいぜいあと数年の命だ。そしてさらに悪いことに、お前とイリヤの命をアインツベルンが狙っている可能性が高い。セカンドオーナー管理者である凜が冬木を離れたところに仕掛けてくるかもしれない」

驚きのあまり声も出なくなっている士郎の代わりに、凜がエミヤを

睨みつける。

「何で士郎とイリヤが狙われるのよ！」

「衛宮士郎はセイバーに聖杯を破壊させた。イリヤはアインツベルンに戻るのを拒否している。つまり、二人ともアインツベルンから恨まれても仕方のない立場にある」

「セラモリスも帰ってしまったのよね。でも、シロウのそばにいたかったんだもの」

小さいイリヤはさびしそうに微笑んだ。

「これについては何とか対策を練ってくれ、としか言えん」

「ずいぶん詳しいのね。……まさか」

凜がはつとしたようにエミヤを見やった。

「そういうことだったの？」

「ああ」

エミヤの表情は苦々しげだ。

「二人だけでわかってないで、教えてくれないか？」

「イシンデンシンっていうのよね、こういうの」

士郎はまだ全然わかっていないし、大きいイリヤの方は妙に感心している。

「士郎、どうしても知りたければあとでアーチャーに直接聞きなさい」

凜は怒ったように吐き捨てると、小さいイリヤに向かって畳み掛ける。

「さて、イリヤ、貴女はどうしたいの？かの有名な封印指定の人形師を探して、身体を取り換えてみる？それともそのまま静かに過ごしたい？」

「私は、シロウのそばにいられば、どうでもいいわ。特に長生きしたいわけじゃないし、このままでいい」

「イリヤ！何をあきらめてるんだよ！」

「違うわ、シロウ。この身体は、キリツグとお母さまから貰ったのよ、そんな簡単に取り換えるなんて、できない。それに、私はアイ

ンツベルンの聖杯であることを誇りに思っているの。身体を交換し、長く生きるのも悪くないわ。でもね、その場合、本来の私の身体は対価として人形師に差し出すことになるでしょう。そんなの、ごめんよ。いくら私の身体のデータがアインツベルンにあるといっても、それこそ、裏切りだわ」

〈フンスファイル

アインツベルンは確かに第三魔法「天の杯」の成就のために異常なほどの執着を持っているが、あくまでも魔術師としての倫理は守っている、まともな一族と言っている。少なくとも一般人を積極的に害する間桐臓硯のような輩とは比べ物にならない。イリヤはアインツベルンを嫌っても憎んでもいないのだ。

「そうね、急いで決める必要はないわ。……士郎、アーチャーと話があるなら、後で、ね」

凜はふう、と溜め息をついた。

士郎の頭の中はぐちゃぐちゃだ。切嗣の実の娘であるイリヤは、絶対を守るべき女の子だ。その彼女の寿命は短く、しかも命を狙われているという。桜のことで頭が一杯だったのに、さらにこんなことを聞かされて、オーバーフローしそうだ。

（アーチャーの野郎、なんでこんなときに言うんだよ）

思わずエミヤを恨みたくなるが、聞かせてもらってよかったことは確かだ。自分には思いつけないが、遠坂凜ならばアインツベルンに対して打つべき先手を思いつくかもしれないのだ。ふと視線を感じそちらに顔を向けると、桜と目があつた。

「大丈夫ですよ、先輩。きっと、何とかかります」

その言葉は、まるで祈りにも似て、士郎を叱咤した。

「桜、ありがとう。うん、何とかしよう」

「相変わらず殺風景というかなんというか」

「うるせえ。お前だって同じだったんだろ」

凜の言葉尻にのって、士郎とエミヤは、士郎の自室に来ている。あ

まりにも物がなさすぎで清潔すぎで、ほとんど生活感を感じさせない部屋だ。実は誰にもわからないところに、こっそり慎二から貰った工口本が隠してあったりする。あんなしょうもないものが慎二の遺品になってしまったのは、なんだかすごい皮肉だ。

「ところで、私に話とはなんだね」

エミヤは腕組みをして、どっかりと胡坐をかいた。士郎もつい対抗して胡坐をかく。

「まず、さつき遠坂と以心伝心やってたこと。どういうことなんだ」

「あまり思い出しくなかつたのだからね」

ふう。溜息をついてから、エミヤは重い口を開いた。

「……要するに、お前が言ってたことは、実際にあったことなんだな」

「そうだ。アインツベルンはセカンドオーナー管理者の目が届きにくい時期を狙って、私たちに仕掛けてきた。……オレはイリヤを守り切れなかつたんだ」

それはエミヤが衛宮士郎だった時、それもまだ成人前の未熟なころのことだ。アインツベルンがイリヤと士郎の命を狙ったのは、実利より単なる嫌がらせ、八つ当たりの意味合いが大きい。もうまともに身体を動かせなくなっていたイリヤをかばい、士郎は重傷を負った。アインツベルンの手のものは、

「貴女がここで死んでくれたら、その男は助けてやってもいい」

とイリヤを脅迫し、それを受け入れたイリヤを士郎の目の前で殺した。アインツベルンは約束を守って、士郎の命は奪わなかつた。守るべき姉が死ぬことイリヤで命を拾った、そのこと自体が、もっとも衛宮士郎を辱めることになる、と理解していたのだろう。

「私の時と状況が似ている以上、アインツベルンが同じことをしかさないとは限らん。おそらく早めに凜がアインツベルンに交渉すれば、うまく奴らを牽制でき、なにことも起こらずに済むかもしれない」

「どうするんだ？」

「まず、アインツベルンには、聖杯戦争の事後報告をなるべく事実
に即して知らせる。まあ、お前の魔術特質は隠し通すべきだが。そ
して、衛宮士郎が遠坂凜の正式な弟子であることも知らせる。そし
て、第三次聖杯戦争でアインツベルンがやらかしたせいで聖杯を破
壊する羽目になってしまったことを抗議する。管理者にとつて冬木
の安全管理は『セカンドオーダー』の探求と同じくらい重要なんだからな」

「うん、なんというか、やたら頭を使うんだな」

士郎はうんうん、と頷いた。

「真面目に聞いているのか」

「聞いてる。アーチャーって、てつきり脳筋だと思つてたけど、実
は頭脳派だったんだな」

「たわけ。まあ、まだお前は経験が浅いから、しかたないか」

「……それだよ」

「何？」

「もう一つ話したかったこと。聖杯戦争の時と今と、なんでそんな
に態度が違うんだ？俺に対して、やけに優しくないか？」

「そんなに違うかね」

「全然違う！聖杯戦争の時のアーチャーは、やたら殺気はとばすは
嫌味は言うは、陰険皮肉屋サーヴァントって感じで、本当に嫌な奴
だったんだ。でも俺にいつもの確な助言をくれて……最後はあんな
形で死んじまうし。あいつの夢は『恒久的な世界平和』だつて、後
で遠坂に聞いて、いい奴だったんだつてわかったんだけどさ。お前
はあまり皮肉も言わないし、俺に殺気もとばさないし」

「もう私としては済んだことだから、あまり話したくないのだがね」
エミヤは目を閉じた。いまさらあの頃のことを話しても、意味はあ
るのか。いや、一応伝えるか？

少し考えてから、エミヤは目を開く。士郎はこちらを真剣に見つめ
ている。

「衛宮士郎。もし将来お前が私のようにすっかり世界と契約してしまつたら、どうする?」

「へ?」

カウンターガーディアン

「もし抑止の守護者になつてしまつたら、どうする」

「どうするって」

「まともな聖杯が存在したとしても、決して英霊の座からおりることとはできない。でも、やめてしまいたい。私はそう思つてしまつたんだ」

（そりや思うだろうな。どう考えても、下手な地獄よりひどそうだし）

凜から聞いたことを思い出して士郎は顔をしかめる。全てを救いたいと願つて英霊にまでなつてしまつた男がやらされることが、よりにもよつて、世界の破滅を食い止めるためにその場にいる全てを殺しつくすこと。確かに救われたものはいるはずだが、決して守護者の目には映らない。エミヤが守護者をやめたいと願つてしまうのはわかるような気がする。そこまで考え、士郎は、はっと目を見開いた。

「ふむ。わかつたようだな」

「馬鹿だ、お前……！俺を殺したつて、英霊になつてしまつたらどうにもならないだろ！」

エミヤシロウ

エミヤシロウ

過去の自分を自分自身が殺す、という矛盾により英霊の座の自分を消す。エミヤが思いついてしまつたのは、そういうことだ。

「まあ、確かにそうなんだが。結局のところ、お前を殺したところで何も変わらないだろうな」

そう呟くエミヤの表情は影を帯びている。

「オレは、呼び出された世界で、答えを得た。だが、本体の私には全く影響がないだろう。どうしようもないな」

「『答え』?」

「『いま生きている衛宮士郎』と『英霊エミヤ』は、全くの別物だということだ。イリヤのおかげで生前の記憶もある程度は思い出せ

たし、少なくともここにいる私は、もう守護者をおりることは考えていない」

「そうなのか？」

「ああ。だが、お前は私のようににはなるなよ。守護者になってしまつて虐殺を繰り返していくと、生前の記憶も信念もおぼろげになつてしまふし、しまいには自分自身を憎むしかなくなるのだから」

エミヤの台詞を頭の中で繰り返し、士郎はぞつとした。

（もしかして、こいつはセイバーよりもっとひどい目に合っているつてことなのか）

セイバー、真名はアルトリアといったあの少女は、死の直前、まだ生きたままでサーヴァントとして召喚されていたが、聖杯を拒否したことで、世界との契約を破棄し、元の自分の時代へ戻つていった。そのまま死を迎えたか、アーサー王伝説にあるように、アヴァロンで眠りについているのかもしれない。どちらにしても、彼女はもう守護者にはならない。

「アーチャー、お前はそれでいいのか？」

「あまりよくはないがね。幸いイリヤと一緒にいられるし、今はこの状況を楽しむことにするさ」

「英霊エミヤ」本体の方はもはやどうしようもない。すでに世界のシステムに組み込まれ、一応人間を守っている存在だ。

「さて、もう少ししたら、私は凜とともに出かける。留守をくれぐれも頼んだぞ」

「わかった」

士郎とエミヤが居間から席を外したあと、残された女性陣はしばらく黙りこくつていた。エミヤの話はあまりにも重すぎた。

「アハトおじい様が私を殺すっていうの？信じられないわ」

ぽつん、と小さいイリヤが呟いた。

「アインツベルンは確かにおじい様が率いているけど、多分来ると

したら、一族の過激派でしょうね。来ない可能性もあるけど、念のために手を打っておくべきだとは思うわ。もし貴女が殺されでもしたら、傷つくのはシロウなのよ」

大きいイリヤは、エミヤの生前の記憶をある程度見ているため、比較的冷静だ。

「それから、貴女が本当にこのまま寿命を迎えて死ぬことを選んで、シロウは受け止めてくれる。今は動揺しきってしまっているけどね」

「イリヤちゃんは本当にそれでいいの？」

桜は小さいイリヤを見つめた。

「先輩のお姉さんなんでしょう。ずっと一緒にいたくないの？」

「もちろん一緒にはいたいわ。でも、身体を交換してしまったら、本当にアインツベルンの襲撃の可能性が高くなってしまう」

外見がどんなに幼かろうと、イリヤは十八歳。育った環境のため情緒が幼い面も多々あるが、頭脳は実年齢通りだ。

一方、大きいイリヤの方は凜に話しかける。

「ねえ凜。後でアーチャーと相談してくれる？多分、何らかの対策は彼も考えているはずだからね」

「あいつが？」

「アーチャーは、自分を守ることは考えてないけど、他人を守るためなら、いくらでもアイディアをひねり出せる性格なのよ。……わかるでしょう？」

「確かに」

凜は大きく頷いた。

第六話 Fateルート後 エミヤの告白（後書き）

「Fate/hollow ataraxia」では、聖杯戦争半年後にもセラもリズもできませんが、あれは一種の夢空間だし、イリヤがアインツベルン城に滞在していたからです。Fateルート後のイリヤは藤村雷画の家に居候しています。

第七話 F a t e ルート後 戦いは一晩で（前書き）

臓硯の「駆除」、すぐ終わってしまいます。むしろその後が大変だ
と思う。

第七話 F a t e ルート後 戦いは一晩で

「ああ、待たせてしまったようだな」

「ごめんな、みんな」

士郎とエミヤが二人揃って居間に戻ってきた。出て行ってから大して時間はたっていない。

「凜、そろそろ出かけよう」

「アーチャー、もう士郎との話は済んだの？」

凜はすつと立ち上がると、エミヤのそばに歩みよった。

「ああ」

「士郎、私たちちよつと出かけてくるから、後はお願いね」

「わかった。気をつけるよ、遠坂」

「大丈夫よ、アーチャーもいるから」

黒髪の少女と、黒い服の大男は、連れだって玄関へ、そして夜の闇の中へ歩み去っていった。

「先輩、アーチャーさんって、もしかして遠坂先輩のサーヴァントなんでしょうか」

桜が玄関まで二人を見送って居間に戻ってきてから、士郎に向かって質問した。大きいイリヤがかわって答える。

「そうよ。アーチャーは確かにリンのサーヴァント。あの二人、結構性格が似てるのよね。二人とも、冷徹な現実主義者のくせして、お人よしなんだから」

「確かにそうかも。シロウに城まで来てもらった時に、わざわざ助けにくるんですもの。全然メリットもないのにね」

（いや、「来てもらった」んじゃないくて「拉致した」の間違いだろ）士郎がつい冷や汗を流すのはもはや約束だ。

「でも、もう聖杯戦争もないのに、どうやってサーヴァントを残し

たんですか？」

桜は不思議そうに首をかしげる。

「ふふ。乙女秘密」

大きいイリヤは楽しそうに答える。

「まあ前例はあるのよね。第四回ときのアーチャーは、受肉して十年間現界していたんですもの」

真面目に答えるのは小さいイリヤ。

「ああ、あの金ぴかか」

「金ぴか？」

「遠坂の命名。真名はギルガメツシュっていうんだ。金髪で赤い眼で金色の鎧をつけてた偉そうな奴。英霊の中の英霊って存在らしい」このくらいはいいだろうな、と士郎は桜に説明する。

「もしかして……」

桜が首をひねる。

「どうしたんだ、桜」

「金髪に赤い眼の男性ひとなら、以前見たことあります。あの男性ひとがそうだったのかしら」

（「今のうちに死んでおけ」だったかしら、物騒なことを言っていた）

何を言っているのかはわからなかったが、特に悪意は感じなかった、と桜は聖杯戦争序盤に出会った人物のことを振り返った。

（まさかこんな日がくるとは思っていなかった）

凜は隣を歩くエミヤを見つめた。服装こそ違っているが、かつての相棒がそこにいる。

「何だね」

「もう一度会えるとは夢にも思っていなかったわ、アーチャー」

「私は『君の』アーチャーではない。こことは別の世界の遠坂凜のサーヴァントだ」

「でも、同じ存在なんですよ」

「それはまあ、そうだが」

「一段落したら、貴方の入れる紅茶が飲みたいんだけど、いいわね？」

「了解した。さて、そろそろか」

エミヤの身につけている服の輪郭がぶれると同時に、上下に分かれている変わった赤い外套、黒いボディーマー、ベルトで固められた黒いミリタリー調のズボン、がっちりしたブーツ、と凜にはおなじみの武装が彼の身体を包んだ。

「どういう仕組みなの、貴方受肉してるのよね？」

「まあ、普通はセイバーみたいに元の服は破れてしまうがね。君ならそれでわかるだろう」

「武装は普通のサーヴァントと同じやり方よね。普通の服は……つて、そんなことに投影使ったの？」

「ではコスプレをしていると。ちなみにイリヤのワンピースも私が投影した」

「うっかり破れたら消えてしまうんじゃないの？」

「消えたらまた作るさ。なに、元の世界にもどれたら本物の服を買うつもりだ。それより、君の方は準備できているんだろうな。こんなところで遠坂の遺伝を発現されても困る」

間桐邸に到着すると、正面玄関からエミヤと凜は乗り込んだ。実は昔から、遠坂と間桐は不可侵条約のようなものを結んでいる。十一年前、桜が養女に迎えられる、ということでは破られているけれど。

「こちらだ、凜」

エミヤは二階へ続く階段へ向かった。凜は黙って後続き、ともに二階へと上がる。

（そういえば、初めて、お父さまの言いつけに背いたことになるわね。全く、こんなことなら、もっと早く来るべきだった）

凜はちらりとそう思うが、何の考えもなしに間桐臓硯に対峙しても

勝利を望めないことはわかっているの、やはり来るのは今しかなかったのだ、と自らに言い聞かせた。

「二階から地下へ続く隠し階段がある」

元の世界ですでにここにきているエミヤは、さつさと地下へ向かう隠し通路のある壁を開いた。むっとする淀んだ、腐った空気が鼻につく。凜は思わず顔をしかめたが、エミヤは無表情のままだ。石造りの階段をゆっくりと降りていく。湿った石畳に降り立つ。

「な……っ、これが、マキリの修練所だっの!？」

凜はつい大声を上げてしまう。エミヤから聞いてはいたが、ここは想像をはるかに超える異様な場所だった。非常に薄暗く、壁も床もあたり一面、おそらくびっしりと苔が生えてでもいるのか、緑色だ。壁面には遺体を安置するための穴が無数に空いていて、無数にうごめく蟲たちが、安置されたそれらを喰らっている、らしい。ここはまさに、「蟲蔵」だ。

マキリの魔術は、蟲使い。ひたすら蟲に身体をもてあそばれて、そうすることで蟲の統御の術を習得する。こんなところで、そんなやりかたで、桜は間桐に染められてきたのか。凜はぎりぎりど歯ぎしりをした。

「凜」

エミヤの静かな声が、嫌悪と怒りに震える凜を冷静にした。

「ええ、アーチャー。殺るわよ!」

凜は手指に宝石を挟んで構える。エミヤは愛用の干将・莫耶を一瞬にして両手に握る。

「セツト A n f a n g ……! 蟲を殺すには、やっぱりこれよね!」

凜の持つ宝石から、すさまじい炎がほとばしる。凜は五大元素アベレージ・ワンの使い手、火の魔術を使うのも当然得意だ。歩く火炎放射器。凜はまさしく士郎がひそかに名づけた「あかいあくま」となって、蟲たちを蹂躪する。

エミヤは地道に蟲を斬りまくる、だけでなく、いつの間にか愛用の

夫婦剣を複数組投影し、投げまくって蟲たちを斬り刻んでいたりする。

「気持ち悪い、けど、一匹残らず消し炭にしてやるわ」

「全く、こんなにいるとは。殺虫剤でも持つてくるべきだったかね」
凜とエミヤ、二人揃って軽口を叩きながらも、蟲一匹逃がすまいと、ひたすら蟲たちを殺しまくる。

桜

「え？」

桜はつい声をあげてしまう。ここにいないはずの人物　　臓硯の
声が頭の中に響いたのである。

遠坂の小娘め、まさかサーヴァントを隠し持っているとは、
意外だったわ。今、お前の姉とそのサーヴァントが間桐邸を襲撃し
ておる。もうほとんどの蟲が殺された

「まさか」

（姉さんが、なぜ？まさか、私のことを知ってしまったの？何も知
ってほしくなかったのに）

桜は顔をこわばらせた。当然、今そばにいる士郎やイリヤたちは驚
いた。なんせ、桜の態度の変化には何の脈絡もなかったのだから。

「桜、どうしたんだ」

「サクラ？」

桜、お前は慌てずともよい。その小僧から、事情を聞き出
してみよ。おそらく何か知っているはず……

「そんなの、無理です。……い、いやあっ！」

桜は両肩を自分で抱きしめるようにして、うずくまった。身
体が、ひどく燃えるように熱い。こんな異常事態は、久々だ。おそ
らく、いま、身体中に埋め込まれている刻印虫が、桜の魔力を強烈
に奪いにかかっている。

「桜！」

士郎は桜を抱きしめる。桜の顔色は、真っ赤になっていて、呼吸は

乱れて浅くなっている。

「しっかりしろ、桜！イリヤ、どうなっているかわかるか？」

二人のイリヤは冷ややかに、まるでモノを見るように、桜を見つめる。正確には、桜の中にいる「モノ」を見ている。

「マキリ、ここまで腐っていたとはね」

小さいイリヤは顔を曇らせる。

「どうやらこちらの推測が当たってしまったようね。仕方ないわね。シロウ！」

大きいイリヤは士郎をうながした。

間桐臓硯の本体はいつどこにいいのか、エミヤにも、はっきりとはわからなかった。まず、臓硯の本体の居場所候補は大雑把にいつて三か所だろうと推測した。

- ・ 間桐邸の蟲蔵。一番可能性が高い。
 - ・ 公園の植え込み。多分違う、が可能性はある。
- そして

・ 桜の身体の中。ある意味一番安全かもしれない隠れ場所。

大きいイリヤは、円蔵山の地下空洞で、間桐臓硯を看取っている。てつきり言峰綺礼に斃されたものだと思っていたから、あんな場所で再会したのは少々意外だった。そのことを聞いたエミヤは、

「多分、桜の中にいる。言峰がとり切れなかった、心臓にいた蟲が奴だろう」

と、臓硯の居場所を絞り込んだのだ。

エミヤが中心となつて考えた「がいちゅう間桐臓硯駆除作戦」。

まず、凜とエミヤが間桐邸を襲撃して、そこにいる蟲たちを全滅させる。ここに臓硯の本体がいれば、一緒に斃してしまえばいい。

本命である、桜の身体の中だった場合、士郎が臓硯を斃し、二人の

イリヤが桜の身体の状態を安定させる。臓硯を斃してしまえば、とりあえず刻印虫の統御は桜自身で行うことができるのである。

（これって「作戦」なんだろうか。なんというか、行き当たりばったりじゃないかなあ。やっぱアーチャーってセイバーに似てるのか）

失礼な感想を持つ高校生主夫はさておき、現時点でとれる作戦としては決して悪くないはずだ。その他のことは、これが終わったら考えればいい。

「 I am the bone of my sword)
我が骨子は絆を結ぶ)」

桜を抱きかかえながら、士郎は小さい声で呪文を唱える。ほどなく右手に現れた切り札 黒白の螺旋を描く矢のような剣 を

握りしめる。これはこの世界に来てからエミヤが作り出したある意味新作の、実は愛用の剣の改造品である。

「悪い、桜。 『カンショウ・バクヤ 夫婦剣・改』!」

真名解放とともに虹色に光り輝きはじめたその剣を士郎はしっかりと握りしめたまま、桜の背中の側から心臓を突きさした。

「……っ」

信じられない、そんな表情を浮かべたまま、桜は意識を失った。

「馬鹿な、桜を殺すとは……」

桜から引き抜いた剣の切っ先には、大きめの蟲が突き刺さっている。ほとんど死に体である。

「この剣は、化け物のみを殺す。桜は死んでない!」

士郎はその蟲、間桐臓硯の本体の疑問にわざわざ答える。

「マキリの目的は『あらゆる悪の廃絶』、そのために根源を目指していたんでしょう。忘れてしまったの?」

大きいイリヤは、剣に刺さったままの、死にかけの臓硯の本体をそつと両手で包み込んだ。

「おお……!」

臓硯はうめいた。そうなのだ。それを実現するために不老不死を欲しただけだったのに、長い年月がそれを忘れさせてしまっていた。

残念ながら、何もなせずに自分は死ぬのだろう。まあ、「彼女」によく似たこの娘に看取られるのも悪くない……。

「潰して、シロウ」

最後に、冷酷な美しい声を耳にして、臓硯の生命は完全に終わりを告げた。

シロウ、ゾウケン は死んだわ。もうそろそろ戻っていらつしやい

エミヤは本来は『遠坂凜』のサーヴァントだが、一度敗退してしまつた結果、彼女とのラインは切れ、かわりに聖杯の器であつた大きいイリヤとつながっている。当然、念話もできるのだ。

「イリヤ。桜は無事なのか？」

多分大丈夫。まだ意識が戻っていないけど。あれ、むちゃくちゃな剣ね。どうもサクラの身体中にあるはずの刻印虫まで死に絶えてるわよ

「上手くいつてよかった。これから戻る。……凜」

「何よ！まだ少し残ってるんだから、ね！」

凜は相変わらず炎を操りまくっている。わずかに残つた蟲たちは懸命に逃げているが、次々焼かれている。

「やれやれ。イリヤ、もう少しかかる。申し訳ないが、待っていてほしい」

リンつたら、仕方ないわね。待つてるわ

念話が終わると、エミヤも再び残りの蟲たちを斬りつけたり踏みつぶしたりし始めた。

小さいイリヤは全身の呪紋を輝かせながら、居間の畳の上に横たわっている桜に、かなり長い間口づけをしている。

「おい、イリヤ……」

「シロウ、邪魔しちゃだめよ。いま急激に刻印虫に吸い取られた分の魔力を、ラインを通じてサクラに補充しているの」

大きいイリヤは不思議そうにしている士郎に、小さいイリヤの行動理由を説明する。

「ラインって、キスしてるだけでできるのか？」

「あら、シロウだって経験あるでしょ」

（いや、その通りだけどさ）

士郎の顔は、ぼん、と赤くなる。聖杯戦争でイリヤと敵対していた時のこと。アーチャーがバーサーカーの足止めをしている間にアインツベルン城から逃げてから、森の中の廃屋で、士郎はセイバーとのラインのつなぎ直しと魔力供給を急遽行わなければならなくなり、その補助のために凜がいきなり士郎にキスをして一時的にラインをつないだのだ。

（ファーストキスをまさか遠坂に奪われるとは思わなかったよなあ）しかもその直後に遠坂の目前で……とても恥ずかしかった。あいつもあの時のことは恥ずかしがるだろう。もうあんなことはごめんだ。「ふうん。そういうこと」

大きいイリヤは面白そうににやりと笑った。

「ええと、イリヤさん？何を笑っていらっしゃるのでしょうか？」

「ふふ。セイバーとシロウが最後まで勝ち抜くにはアレしかないでしょうしね」

「わーわーわー、言うなあー！」

「照れてるのね。かわいいわ、シロウ」

「だから黙ってくれ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぎまくる外野に、

（静かにしてくれないかしら）

桜に魔力の補充を終えた、小さいイリヤは呆れ果てていた。

（何とか身体の方は落ち着いたけど、問題は心の方よね）

まだ意識を取り戻さない桜を見つめる。

（「なんで知られたんだろう」って悩むだろうから、全部話しても

らうしかないのかな)

本来なら、並行世界から来た二人のことは極力内密に済ませるべきなのだが、急に、これだけの確に行動すれば、桜は絶対に不審を持つし悩むだろう。

「ふうん。興味深い文献がいろいろあるわね。さすがマキリというべきかしら」

「凜、蟲は全滅したし、とりあえず引き上げようではないか」

「蟲の使役だけじゃなくて、結構まとまな魔術も載ってるわよ」

蟲たちの駆除のあと、凜はエミヤを引き連れて間桐邸内を探索している。書庫にあつた魔術書の数々をばらめくったりしている。

「なんか最近読んだ跡があるけど、桜かしら」

「いや、慎二だろう。あいつは陰では努力をしていたようだからな。今から思うと、遊び人であることを演じていたような気がするな」

「魔術回路もないのに？」

「『届かない夢を持つのは間違っている』、そう思うのかね、君は」
凜は言葉を詰まらせる。なぜ、士郎と慎二が仲が良かったのか、その理由の一端に触れたような気がした。

「そんなに読みたければ、後で桜に見せてもらえばいいだろう。今夜は早く戻った方がいい」

エミヤは服装を普通のものに戻してから、凜を促した。

「そうね。途中で、遠坂邸に寄りたいんだけど、いいわよね」

「了解した。おい、その魔術書は置いて行きたまえ。強盗になるぞ」

「うーん、もうなってるような気もするけど。じゃ、帰りましょ」

あかいあくまとそのお供は、とりあえず遠坂邸に向かった。

第七話 F a t e ルート後 戦いは一晩で（後書き）

士郎の切り札は、文中にもあるように、あえてエミヤの愛用の干将・莫耶の改造品にしました。「F a t e / c o m p l e t e m a t e r i a l I I I W o r l d m a t e r i a l」（発行：インターブレイン）の134ページに、オリジナルの干将・莫耶は対怪異専用の強力な宝具であるという記述があります。そこから考えてみました。オリジナルほどの威力はないが大抵の化け物は殺せる、というコンセプトでエミヤが作りました。

第八話 F a t e ルート後 むかしばなし（前書き）

今回は中休み。エミヤの生前の聖杯戦争の捏造設定、第四話後書きに記したものを使ってみます。聖杯戦争後しばらくは全員生存していたのに、イリヤも桜も慎二も救われてない、というひどい話。

第八話 F a t e ルート後 むかしばなし

「ただいま」

「いま戻った」

凜とエミヤが衛宮邸に戻ったのは真夜中もいいところだった。

「何やってたんだよ、遠坂、アーチャー」

「おそーい！」

玄関まで迎えに出た士郎は口をとがらせている。隣の大きいイリヤも少々お怒り気味だ。

「悪かったわ。ちよつとね」

「申し訳ない。遠坂の屋敷に立ち寄って、少々荷物を持ってきた」
凜とエミヤはそれぞれ紙袋を手に提げていた。実は荷物の中身は、凜の方はお気に入り紅茶の葉と着替え、エミヤの方はティーセットだったりする。

四人揃って居間に入ってから、エミヤの入れた紅茶が振る舞われた。一口飲むなり、凜と大きいイリヤは満足そうに目を細め、士郎の方は目を見開いた後やや不機嫌そうに眉を寄せた。何となく全員黙って紅茶に口をつけている。すでに二人のイリヤと士郎は交代で入浴を済ませてしまっており、小さいイリヤと桜は同じ布団で仲良く夢の中だ。本来桜の部屋は離れに用意されているのだが、今夜は母屋の和室の一室を使っている。

紅茶をカップ半分ほど飲んでから、士郎が切り出した。

「桜、まだ気が付かないんだ。とりあえず大丈夫だろうって、イリヤは言ってたけどさ」

「一応リンにも見てもらいたんだけど、多分大丈夫よ。それよりこれからのフォローが大変だね。明日……というよりもう今日ね、学校は休んで頂戴」

あふ。かわいいあくびをしながら、大きいイリヤは提言した。

「それぞれ学校に欠席の電話をして、藤村先生には……朝の段階で

記憶操作するしかないか」

凜は顔をしかめる。それから、あ、忘れるところだった、と持ってきた包みを取り出す。

「イリヤ。貴女、私とあまり体格が変わらないみたいだから、明日はこれ着てみて」

「え」

「昼間着てるワンピース、アーチャーが投影したものだっていうから。破けたら消えるかもしれないのよ、そんなの困るでしょう」

ちなみにいま大きいイリヤが着ているのは、凜が貸してくれたパジャマだ。

「消えたらまた作るが」

口をはさんだエミヤに凜はにっこり笑って告げた。

「あんたは男だからいいけど、イリヤは淑女レディなのよ。全然わかってないんだから」

「ありがとう、リン」

大きいイリヤは包みを抱きかかえて礼を言う。

「詳しい話は明日にしましょう。とりあえずお風呂入ってくるわ。

まだお湯落としてないわよね」

凜は紅茶の残りを飲み干すと立ち上がった。

桜は目を開けた。板張りの天井が目に入る。身じろぎすると、身体が妙に拘束されているを感じた。

（え、イリヤちゃん、と、姉さん？）

イリヤと姉が両隣にそれぞれ自分に抱きつきながら眠っている。さらにもう一人のイリヤが部屋の入り口の近くで休んでいる。

（ああ、そういうば今夜は先輩のうちに泊まって……）

ここはなぜかいつも桜が泊まる離れの洋室ではなく、母屋の和室だ。不思議に思いながらも瞼が重くなって、桜は先ほどのことを思い出すこともなく、気持ちよく寝入ってしまった。

士郎は自室を出た。すでに凜もエミヤも入浴を済ませ、風呂掃除は最後に入浴したエミヤが行い、全員眠りについてはいるはずである。しかし。自室で眠れずに悶々としていたところ、廊下から足音が聞こえたのだ。

（やっぱり、あいつか）

士郎が貸した寝間着を身につけたエミヤが縁側に腰を下ろして、ぼんやりと月を眺めている。冴えわたる月の光が彼の白髪をくっきりと浮かび上がらせていた。エミヤが士郎のほうに振り向いた。

「眠れないのか？」

「それはこっちの台詞だ。まあ、俺も眠れないんだけどさ」

士郎はエミヤの隣に腰を下ろした。あえてエミヤの顔は見ずに言う。

「ありがとう、桜を助けてくれて」

「助けたのはお前だろう」

「お前がいろいろ教えてくれなかったら何も知らないままだった。

だから、ありがとう」

「まだそれは早い。臓硯を斃しただけでは、桜を救ったことにはならんしな」

「あとは身の振り方と、気持ちの問題かな。遠坂もいるし、何とかなるさ」

「……そう簡単にいけばいいな」

「嫌味な言い方するなよな」

士郎はむっとしてエミヤを睨みつけ……存外に深刻な彼の表情に戸惑った。

「桜がどんな目にあってきたと思う？私やイリヤでさえほんのわずかししか知らない」

エミヤは目を閉じた。何も知らないまま故郷を離れ、遙か遠くで死を迎えた自分。この桜を助けたところで、かつて自分が生きていた時の妹分が救われるわけではない。それでも、桜は桜だ。何とかなってほしいと、強く願っている。

「あまり悲観的になるなよ、アーチャー」

「人間は、どこまでも醜くなれるものだと思ってはいるが、正直いつて滅入る」

「それって臓硯のことか」

「まあ、そうだな」

間桐臓硯ことマキリ・ゾルケンの夢は「あらゆる悪の廃絶」、エミヤの理想である「恒久的な世界平和」とはつきりいつて似たようなものである。そんな美しい夢を実現するために「」を希求したはずの臓硯は、永すぎる時間に魂が老い腐ってしまい、あくまで不老不死は「」にたどり着くまでの手段にすぎなかったのにいつの間にか目的と化してしまった。一般人を喰い歩き、自分の子孫や養女を道具にしてしまったりして、自分自身が「悪」としか言えないものになってしまった、それはなんて皮肉なことだろう。

「慎二が生きていてくれたらよかったのにな。あいつは絶対に桜の味方なのに」

しんみりとした口調で話すエミヤに、つい士郎は反論する。

「何でそう言い切れるんだ」

「覚えているからな。聖杯戦争のあと、二人が仲直りして、もう大丈夫だと思ったんだ」

しかし、おそらく桜も慎二もただひたすら耐え続けていただけだ。実際は全然大丈夫なんかじゃなかったのだろう。

「お前の時、慎二は生き残ったのか」

「ああ。イリヤが殺そうとしていたのを止めるのが間に合っただけ。とりあえず衛宮邸で保護したんだ」

「よくセイバーが許したな」

「いや、あの時はセイバーは魔力不足でほとんど起きられない状態になっていた。遠坂は慎二を匿うのに反対して教会に行かせようとしたんだが、どうにも言峰は胡散臭く感じたんで、何とか押し切った。そのとき慎二がとんでもないことを言い出して……まあ確かに

結果オーライだったんだが、あれは羞恥プレイとしか言えん」

「何を言っただよ」

「セイバーへの魔力供給のやり方。『そんなこと、女の子の前で言うな!』と思わず怒鳴ってしまった」

「ああ……」

（やつぱりこいつ、「俺」だ。話し方、いつの間にか俺とほとんど同じになってるし）

「よりもよって遠坂に媒介をさせるし。まあ慎二が覗こうとしなかつただけでも良かったんだが」

「アーチャー……」

自分の時もなかなかとんでもなかったが、ある意味エミヤの時の方がさらにひどいような気がする。

「はつきりはもう覚えていないが、多分お前の時よりセイバーに余裕が出たと思う」

「何なんだ、それは」

かなりシリアスな話をしていたはずなのに、いつのまにか話の筋がずれまくっているような気がする。

「オレの時の慎二の話をしただけだ、他意はない」

「お前なあ……」

（いや、思い切り他意があるだろ!）

さも生真面目そうに首を振るエミヤを見て、士郎は確信する。

（本気で落ち込んでたくせに、こっちに気を遣って、わざわざふざけた方向に話を持っていきやがった）

多分、本当に、エミヤにとって「衛宮士郎」は「他人」になったのだろう。そうでなければ、わざわざ自分を道化役ヒエロにしてまで、気を遣ったりはしない。

「桜のこともそうだが、大聖杯をどうすべきか。セイバーが破壊したのは、私の時と同じなら、天上に空いた黒い孔だろう? あれは大聖杯のなかの魔力溜まりとつながっていたはずだから、ある程度は

魔力が吹き飛んでなくなっているのだろうが、地脈のマナが溜まればまた聖杯戦争が起きる」

「破壊するって言うていただろう、お前」

「もちろん壊すつもりだが、下手をうった場合凜が管理者として妙な責任を被せられる可能性がある。やはり対応策は、凜に相談すべきか。お前に相談しようと思ったのが間違いだな」

エミヤはひとり深く頷いている。それでも悪気はない。多分。

「勝手に一人で納得するな、テメエ！」

士郎が怒鳴った直後、美しい声が背後から響いた。

「大声を出さないで。皆が起きちゃうでしょう」

「あ」

「イリヤ。桜に変わりはないか？」

士郎は慌てて口をつぐみ、元凶のエミヤは平静に、急に現れた大きいイリヤに問いかけた。

「さつき目が覚めたけど、すぐ眠っちゃった。具合の悪そうところとはとくになかったと思うけど。シロウ、宝具を投影したあとなんだから、ちゃんと休まなきゃだめよ」

「眠れないんだよ」

士郎はむつと眉を寄せる。

（大体こんなにいるいろありすぎて眠れるもんか）

「それなら気分転換で、全然関係ないことを話さない？例えば私たちがどこから出てきたか、とか」

「どこって、並行世界だろ」

「そういう意味じゃなくてね、私たちはこの家の土蔵にある魔法陣からこの世界に出てきたの。あの魔法陣、調べてみたらアインツベルンの術式だったわ。十年前に多分お母さまが構築したものよ」

「そういえばセイバーもあそこから出てきたんだ」

「おかしいわね、あれ召喚陣じゃないのに」

「案外いい加減なものだな。まあ私も……」

言いかけてエミヤは口をつぐんだ。遠坂凜はきちんと地下室に召喚

陣を描いていたのだが、実際エミヤがサーヴァントとして召喚されたのは遠坂邸の居間。かなり大きな音が響いたので、境界が張られていなければご近所さんに気付かれていたかもしれない。天井を突き破って召喚されてしまったせいで、部屋中瓦礫だらけになり格調高い家具が破壊されまくり……とんでもなかった。あのせいでつい「未熟者のマスター」に苦情を言ったのは間違いではない、と思う。おかげで凜に「全命令絶対服従」という令呪を課せられてしまったのは、今となっては懐かしい。

「ちよつと待て。じゃああの時うちの中でお茶を飲んだのは」
士郎は、昨日、正確には一昨日の午後、目の前にいる二人、並行世界のイリヤとアーチャーことエミヤに、何の前触れもなく居間で出会ったことを思い出す。

「そうよ。最初からこの家に出てきたんですもの。ここの状況がわからないのに下手に外出したらいけないと思って、シロウの帰りを待っていたの」

「はあ」

（今頃になってその説明かよ！）

と内心士郎は思ったが、勿論イリヤ相手に言えるわけがない。

ふと、エミヤが士郎に問いかけた。

「衛宮士郎。今後お前はとうするつもりだ？」

「え。今後？」

「凜の弟子になって魔術を正式に習うのは構わないが、時計塔には行かない方がいいと思う。ごく普通の職業を選んでこのまま表向きは普通の人として暮らすのは無理、か？」

「何で、そんなことを」

「お前はまだ、何もなしていない。だから、今なら間に合うんだ。私や切嗣のように戦場を駆け巡ることを選べば、いざというとき、どうしても魔術をも使用してしまうだろう。お前の魔術は封印指定級なんだ。魔術協会にばれたらその時点で身の破滅を覚悟するしか

ない」

「いや、でも、俺は」

「人を守る職業としては、警察官、消防官、弁護士、医者、まだまだあるな。日常の何気ない暮らしを守ることこそ、立派に『正義の味方』だと思うがね。戦場なんぞに出向けば、否応なしに人殺しになる。」

もし言峰を殺したことを気にしているのなら、あいつは十年前に切嗣に斃されていて、すでに死人だったのだから勘定に入れる必要はない」

「アーチャー、お前、自分のしてきたことを否定する気か？」

士郎はかなり不快になる。目の前のこの男は、自分の理想を貫き通した果ての「衛宮士郎」その人なのだから。

「いや。後悔はあるが、間違っただけだと思っただけ。もともと正しかったとも思わないがね。藤ねえや桜や慎二や一成、彼らとともに日常を生き続けてもよかったのではないかと考えたことは何度もある。私のやった完全な過ちは、世界と契約してしまったことぐらいか。だからといって、世界と契約しなければ守護者にならないというわけではない。この時代でうっかり英雄にでもなってみる、霊格は大して高くないから、おそらく守護者の仕事をさせられるぞ」

「お前、俺を心配してくれているのか？」

「お前と、お前の周りの者たちをな。お前が自分の命を勘定に入れることができないのは、もう仕方がない。だが、せめて、周りの者たちの気持ちを守るために自分を守る、ぐらいは考えられるようになった方がいい。お前が不幸になれば周りの者たちも不幸になる。」

そういうことだ」

なんで自分自身に説教などしなければならないのか。エミヤは溜息をついた。今こうして士郎に語りかけていることは、全てかつての自分自身に跳ね返ってくる。自分で言っていて、耳が痛い。正直、どれくらい効果があるか、疑わしい。ここの衛宮士郎は、セイバーを深く愛した。彼女の生き方に深い感銘と共感を感じてしまってい

るこの少年は、やはり自分のようになってしまふのだろうか？

「でも俺は、切嗣^{じいさん}と約束したんだ」

「だからと言って、『魔術師殺し』の後継者になることもあるまい」

「……なんだよ、それ」

士郎は、あまりに物騒な単語に思わず疑問を呈した。

「キリツグの二つ名よ。『エミヤ』の名は、『魔術師殺し』の後継者だと自ら名乗るようなもの。シロウが時計塔にでも行ったら、絶対警戒されるし、監視もつくかもね」

大きいイリヤはエミヤの発言に補足した。

「平和を望むがゆえに、必要な犠牲を殺す、それが切嗣のあり方だった。切嗣が初めて殺したのは、実の父親だったらしい。その後、主として外道を行う魔術師を殺すようになったのが『魔術師殺し』という異名のついた理由だな」

「なっ！？」

「まあ、私も切嗣の背を追いかけてこうなったのでね、説得力がないのはわかってる。だが、そもそも、オレに『魔術を用いて正義の味方になれ』とは、切嗣は一言も言っていない。オレが勝手に切嗣のやり方を模倣してしまっただけだ」

エミヤは目を閉じた。かつて、幼かった自分は冬木の大火災の中、身体のいたるところをもスタスタに傷つきながら、とにかく生き抜くことだけを考えて、人々の悲鳴を懇願を助けを求める声をひたすら無視してただ、歩いた。あのときに心が死んで、切嗣によってかろうじて生命を救われた。子供の世界は狭い。あの火災で、両親も家もなくし、近隣の友人も顔見知りのおじさんおばさんも、親しい人、見知った人は皆死んだ。あのころの自分の拠り所は切嗣ただ一人であり、自分はある意味その子供のころのまま、切嗣の夢を自分のものとして生き続けて、そして死んだ存在だ。

「多分、自分のあとを継ぐのを切嗣は喜ばない。もう少し考えてみるのだな」

エミヤの言葉は正しいのだろうか、どうも士郎は素直に聞く気にな

れなかった。自分の顔がふくれつつらになるのを感じる。

「勝手なこと言いやがって。お前はどんなんだよ」

そう、こいつ自身は切嗣のあとをしつかり追っているではないか。

「……もし切嗣が生きていたら、とても顔向けできないな。どう考えてもあの人を泣かしそうだ」

エミヤはもう、苦笑するしかない。

衛宮士郎は、かっこのおれここまで頑

迷だっただろうか？

「そもそも貴方の場合は、もう取り返しがつかないでしょ」

銀髪の少女は、白髪の大きな弟に背中からぎゅっと抱きついた。

「あんまり心配しても、シロウが自分で納得しなきゃどうにもならないわ。二人とも、いい加減休まないとまずいわよ。桜にちゃんと説明しなきゃいけないんだから」

「む」

「うん、納得できないけど、わかった、もう寝るよ。おやすみ、イリヤ、アーチャー」

「……ああ」

「おやすみなさい」

大きいイリヤとエミヤが割り当てられた部屋に戻っていくのを見つつ、士郎も腰をあげた。自室に戻りつつ、エミヤと彼の語った話に思いをはせる。

（俺が憧れているのは切嗣じいさんだけじゃない。セイバーもだし、アーチャー、お前だって眩しいくらいに真っ直ぐに生きたんじゃないか。それでも、お前たちを目指しちやいけないのか？）

第八話 F a t e ルート後 むかしばなし（後書き）

エミヤ、士郎にお説教の回、でしたが、士郎が彼を尊敬してしまっているせいで、かえってほとんど効果がなかったりする。

士郎を多少とも変えられるのは、残念ながらエミヤではありません。

士郎は、高校生の時点では両親と死に別れた情景（外の異常に気づいた両親とともに避難することになり、士郎一人だけ家の外で待たされていて、次の瞬間両親が中にいる自宅が一度に一気に燃え上がった、というやつ）を覚えているようなのですが、英霊エミヤが覚えているかどうかは疑わしいので、あえてカットしました。この辺読んでいてぞっとした。これに続いて燃え広がる街を歩き続けたら、心が壊れてもおかしくないと思う。

切嗣の「魔術師殺し」としての仕事ぶり、エミヤはあえて最低限のことしか士郎に伝えていません。今のところ士郎の頑迷ぶりに苦笑するだけで済んでいます。ずっとこの調子だったら、士郎を叩きのめしにかかりそう（斬りかかりはしないかな？）。

第九話 F a t e ルート後 姉妹の会話、そして（前書き）

今回、世界移動の原因を皆で推測してますが、実際はどうだったのか、あえて書く気はありません。ご想像にお任せします。

第九話 F a t e ルート後 姉妹の会話、そして

そこは地獄のような場所。阿鼻叫喚、という言葉はきつと目の前の光景のためにある。聖杯戦争で出会った赤い弓兵が、並行世界の未来の自分が、その灰色の瞳に何の感情も宿さないまま、両手に持つ夫婦剣で、あたりの人々を手当たり次第に斬り殺している。逃げ惑う人々の上空から、無数の剣群が降り注ぐ。

やがて、そこは数えきれないほどの軀で埋め尽くされ、動くものがなくなった。うつすらと姿がばやけていく弓兵の瞳に、初めて悲しみと怒りの感情が宿った。

「アーチャー！」

士郎は自分の叫び声で目を覚ました。びつしりと寝汗をかいている。時計を見ると、六時過ぎくらい。今日は学園を休む予定なのでもう少し眠ってもいいのだろうか、このまま起きることにする。

（いまの夢、アーチャーの、「守護者の仕事の風景」なのか？なんで俺がこんな夢を見るんだろう）

あいつと別にラインをつないでいるわけでもないのに、と士郎は首をひねる。同一人物同士 of 精神共感現象。じつは聖杯戦争中

にもあったのだが、士郎がエミヤに興味を抱いてしまっているせいで、それが顕著になっているだけだったりする。

シャツとジーンズに着替えて顔を洗い、台所に入った士郎が目にしたものは、エプロンをつけて嬉々として朝食の準備に取り掛かるエミヤだった。いや、予想はしていたが。

「おはよう、アーチャー」

「ああ、おはよう。今朝はたまには洋食でもいいかと考えているんだが、どうだろうか。米は既に炊けている」

「昨日は朝食も夕食も和食だったから、いいんじゃないかな。俺も

手伝うよ」

二人並んで穏やかに調理を始めた。だが。

「ふん。未熟者め。こちらはもう下準備がすんでしまったぞ」

「手際が良すぎだ！あんた絶対料理人になるべきだったと思うぞ」

「ふ。ついてこれるか？」

「ついていけねー。ありえねえ。何なんだ、朝からこのテンション」
嬉しそうに調理に腕を振るうエミヤに、何となく士郎は激しい疲れを覚えた。

「きゃあっ！朝から豪勢だね。お姉ちゃん嬉しいよお」

食卓につくなり両手を胸の前で組んで目を輝かせているのはもちろん、士郎の姉貴分の大河である。

「あれ、まだ桜ちゃん来ないの？これ作ったの、桜ちゃんじゃないの？」

今朝の朝食は、カキのドリア、オニオンスープ、レタスとトマトのサラダ、とごくシンプルなメニューだが、意外に作るのにはかなり手間がかかるものだ。

「ああ、これ、アーチャーの奴が作ったんだ。俺は少し手伝っただけ」

士郎は少々エミヤの料理へのこだわりようにがっかりしていたりする。

（ドリアに使うホワイトソースまで、手作りするとは思わなかった。俺なら缶詰のを使うぞ。サーヴァントが、こんなのでいいのか？聖杯戦争のとき、もしかして遠坂にご飯作ってたんじゃない……）

「わあ、アーチャーさん、すごい！コックさんに転職したら？」

「藤村さん、貴女まで彼と同じことを言うのかね」

せっかく賞賛されているのに妙にクールに対応するエミヤ。そこに残りの女性陣一同、二人のイリヤと凜と桜が起きだしてきた。

「おはよう」

「おはよう」

「おはようございます」

「お、おはようございます」

最後の桜以外はきはきと挨拶している。

「おはよう」

「おっはよう！」

「おはよう。……遠坂、今日はめずらしく寝起きがいいみたいだな」
つい士郎は余計なひと言を口にしてしまう。今日のように朝からぱつちり目の覚めた遠坂凜、というのは希少である。

「まあ、ね。藤村先生、私たち、今日は学校を休みます。いいですね？」

「だめだよ遠坂さん、さぼったら不良になっちゃうよ。あ」

凜をキツと見据えた大河は、不意に黙り込んだ。

「藤ねえ？」

「藤村先生？」

士郎と桜は驚いて大河を思わず見つめた。大河の表情は普段と打って変わって真剣そのものだ。

「……今日だけよね？」

「はい、そのつもりです」

「無理はしないようにね。じゃ、いただきまーす」

大河は目の前のおいしそうな朝食に手を付け始めた。

「遠坂、何したんだ？」

「まだ何もしてないわよ」

「まだって」

士郎と凜がひそひそささやき合っているすぐそばで、桜はつい朝食のメニューを再確認していたりする。

「アーチャーさん、これ本当に貴方が作ったんですか？」

先ほどの大河と士郎の会話をきいていたのだらう、桜は驚きのあまり目を見開いている。今では料理の師匠である士郎を洋食部門ではこえつつある彼女だからこそ、目の前の料理の出来栄は見ただけでも大体分かり、愕然とせざるを得ない。

「アーチャーのご飯はおいしいわ」

「本当にね」

大河に続き、二人のイリヤはさっさと食事を始めている。一方桜のあまりの驚きように、エミヤは憮然とする。

「確かに私が作ったが、そんなにおかしいかね」

「い、いえ、すみませんっ」

桜が恐縮してうつむいてしまうと、士郎が苦笑いして告げた。

「拗ねるなよ、アーチャー。それより、早く食べないと味が落ちると思うぞ」

「……いただきます」

残りのメンバーの声がきれいにハモった。

朝食は「好評」の一言に尽きた。大河は初めから大目にご飯・具ともに入っているドリアをきれいに平らげると、続いてデザートを要求した。他の者たちはまだ食事をおいしそうに食べている。大河ほどではないがかなり大食の桜は、普段より食べるペースが少しだけ遅い。

「はい、藤ねえ」

士郎がこの時期旬のグレイプフルーツを横半分に分切ったものに蜂蜜をかけてスプーンをつけ、大河の前に置いた。

「うん、おいしい。なんか今日はレストランみたいだね」

大河はにこにこしながらフルーツに手を付ける。

「じゃあみんな、あとでちゃんと学校に欠席の連絡してね。いつてきまーす」

大河はエミヤ手製の弁当を受け取ると、急いで外に飛び出していった。彼女以外の面々はやつとデザートに入ったところだ。

「……あ。記憶操作忘れた」

凜がぼつりとつぶやくと、エミヤが律儀に答えた。

「あの調子では必要ないのではないかな。どうも見て見ぬふりをし

てくれたようだ」

「藤ねえの野性の勘か……」

虎は侮れん、と士郎は深く感じ入ってしまった。

「ところで、タイガも出かけたことだし、そろそろ本題に入りましょう」

大きいイリヤの真面目な声がこのまつたりした空間を壊した。

「サクラ、昨夜のこと、覚えているんでしょう？よくいつもと同じようにできたわね」

いいいいいこ、と小さいイリヤの方は、桜の頭をなでた。桜の表情は一転して、硬くこわばっている。

「その前に、食器の洗い物くらいはしたいのだが」

「デザートくらいはゆっくり食べようぜ」

二人のエミヤはそんな桜の様子を見て、「少し後回しにしたい」という思いもあつて口をはさんだ。

「そうね、じゃあ片づけお願いね、アーチャー」

「それなら君も桜を見てくれ、凜」

世界は異なるものの、さすが元「赤い主従」の会話は息があっている。エミヤはフルーツの皿以外を素早く回収し、台所で洗い物を始めた。士郎もエミヤのあとを追う。

「俺も手伝うよ」

「お前も今は、桜のそばについている」

「えっと」

「多少は昨夜の事情を話してもいいが……いまはとりあえずお茶でも入れている」

「わかったよ」

士郎はとりあえず居間に戻り、お茶を入れ始めた。桜には小さいイリヤが寄り添っていて、大きいイリヤと凜は行儀よく座ったまま黙りこくっている。

「申し訳ない、お待たせした」

黙ってデザートをつつきながらお茶を飲んでいたところに、エミヤが台所から戻ってきた。士郎が声をかける。

「もう洗ったのか、早いな」

「洗った食器は水切りかごに入れてある。あとでふけばいいか？」

「ありがとう」

「ところでどこまで話したんだ？」

「まだ何も」

「私とイリヤのことくらい説明しておいてもよかろうに。」

桜。

君には謝罪すべきかもしれない」

エミヤの言葉に、桜はゆっくりと顔を上げた。

「どういう、意味ですか？」

「君の十一年間の苦しみを無駄にしたからだ。君にはもう、間桐の魔術は使えない」

桜の体中に埋め込まれていた刻印虫は、全身の神経を侵して同化していた。いわば体中に間桐の魔術刻印が刻まれていたようなものだった。士郎が昨夜桜に加えた一撃が、それらを全て消滅させてしまった。いまの桜には、生まれつきの魔術回路のみがある状態だ。

「あの、私、死んだと思ったんですけど、あれは」

「私の持つ『化け物のみを殺す剣』を衛宮士郎に渡しておいたんだ。だから君は無傷で済んだ」

エミヤの言葉で、桜は自分の身に起きたことをやっと正確に把握できた。

（おじい様はいないし、もう蟲とも縁が切れた、ということ。でも）

「……何でもつと早く来てくれなかったんですか」

桜はエミヤを睨みつけた。自分勝手なことを言っているのはわかっているのに、言葉が止まらない。

「せめて聖杯戦争の時に助けてくれたらよかったのに、何で！なんで今頃……！」

「……すまない」

桜に向かって頭を下げるエミヤを、士郎が小突いた。

「む」

「なに謝ってるんだよ、アーチャー。お前は这个世界のアーチャーじゃないんだから、まずそこから説明しろよな」

「しかしだな」

「大体お前らの意志で世界移動したわけでもないんだろ」

「まあ、それはそうだが、この事態はあの時私が少々余計なことを考えたせいのような気もするしな」

「先輩？アーチャーさん？いったい」

「エミヤと士郎のやり取りを聞いて、桜は少々落ち着きを取り戻し、問いかけた。」

「この世界のアーチャーさんじゃないって、どういう意味ですか？」

「ごめんなさい。先に話すべきだったわね」

「大きいイリヤが口をはさんだ。こことは別の世界で起きた冬木の第五次聖杯戦争、その経緯を大まかに説明する。」

「じゃあ、イリヤさんはこのイリヤちゃんと同一人物ってことなんでしょうか？」

桜は、自分に寄り添っている小学生くらいの少女と、自分よりやや年上の外見の少女を見比べる。確かに白銀の髪、赤い眼、透き通るような白い肌は同じで、顔立ちも似ているが、てつきり本当にいと同じ土のために似ているのだとばかり思っていた。

「ええ、そうよ。どういうわけか、実年齢通りの姿になっているけどね」

「それでアーチャーさんは、イリヤさんと同じ世界から来た、と」

「ああ」

「でもいっいたい、どうやって世界移動なんて」

「聖杯のおかげだと思うのだが」

「でもよく考えたら、聖杯で第二魔法は無理なんじゃないかしら」
小さいイリヤが首をひねると、凜が口をはさんだ。

「案外、大師父がちょっかい掛けたとか」

つい士郎は思いついて彼女の言葉に付け加えてしまう。

「どこかの世界で魔法使いになった遠坂がすっかりやったとか」

「衛宮くん。どういうつもりでそういうこと言うの？」

「遠坂って宝石翁の弟子の子孫なんだよな。未来のお前ならできそうな気がするんだが、無理か？」

「もちろんそれを目指してはいるけど、いつになるのか。難しいわね」

凜が思わず考え込んでしまうと、エミヤが逸れかけた話を強引に戻した。

「間桐家にはもう桜しか残っていない。間桐家を継ぐのか、それとも遠坂に戻るのか。君はどうしたいんだ、桜」

「私、ですか？」

「もう、慎二もいないしな。遠坂は姉としてどう思ってるんだ？」

士郎はあえて単純に事実を告げた。士郎個人としては、桜が魔術師として生きるのには反対したい。だが、桜が間桐家に養女に出されたのには深い事情があるはずで、何も知らないのに口をはさめない凜はしばらく、らしくなく俯いていたが、ぼつりぼつりと語り始めた。

「……お父さまが決めたことだから、遠坂も間桐も魔道を修める家だから、ずっと我慢してきた。陰から桜を見守ることしかできなかった。私は、できたら戻ってきてほしい。聖杯戦争でお父さまが亡くなって、お母さまが脳障害でおかしくなって……何年もたたずに亡くなった。私は、ずっと一人だったの。ただ、あんな奴だけど、綺礼だけは時々気を遣ってくれたわね」

ただし、後見人であった言峰綺礼は凜と桜の父、遠坂時臣を殺した人物でもある。聖杯戦争終盤、凜は本人から直接聞いている。

「お母さまが……？」

桜は目を見開いた。第四次聖杯戦争で父が亡くなったらしいのは聞いたことがあるような気もするが、母は一般人なのだから、まさかそんなことになっているとは思っていなかった。だが、疑っ

てみるべきだったのかもしれない。比較的自由に外で行動できるようになってからも、凜とは出会っているのに母の顔を見たことがない、その意味を。

（私には、兄さんもいたし、おじい様もいた。姉さんは、ずっとあの家で、一人だったんだ……）

桜は、姉の凜が、決して幸せではなかったことにたつたいま、気付いた。遠坂凜は、セカンドオーナー管理者である遠坂の魔術師だからこそ、「ミス・パーフェクト」と言われるくらいに完璧な優等生として振る舞っていたにすぎないのだ。

「遠坂先輩。いえ、姉さん」

桜のきつぱりした声に、凜は顔を上げた。

「間桐をどうするかはともかく……私、姉さんと一緒にいてもいいんですか？」

「桜」

「私、迷惑じゃなければ、姉さんのそばにいたいです」

「迷惑なわけ、ないでしょう！」

凜は立ち上がって、桜を抱きしめた。その蒼い眼から、涙がこぼれだす。

「私のあげたりボン、ずっとつけてくれていて、嬉しかった」

「姉さん……」

しゃくりあげだした凜に抱きしめられながら、桜は奇妙なほど平静を保っていた。

（私は、ずっと解放されたかった。それなのに、助けてもらったのに、なんであまり嬉しくないんだろう）

本当に現実なのか。自分に都合のいい夢を見ているんじゃないだろうか。何年も苦しんできたのに、こんなにあっさり救われるなんてこと、あるんだろうか。桜は今のこの現実を疑っていた。

「まあ、よかったよな。家族は一緒がいいもんな」

「衛宮士郎、そんな気楽なことでもいいのか？ところで今のうちに食

器を拭いてきてもいいか？」

「勝手にしてくれ。全く、どっちが気楽なんだよ……」

「ね、シロウ、リンが貸してくれた服、似合ってると思う？」

「イリヤまで。……うん、似合ってる。ちよっとセイバーが着てたのに似てるかな」

「ふふ。リンも結構かわいいの持ってるのね」

凜が涙と鼻水でぐちゃぐちゃになってしまった顔を洗うために席を外していたところに、エミヤが再び台所から戻ってきた。みんなのお茶を入れ直していた桜は、穏やかな笑顔でエミヤを見つめた。

「あの、アーチャーさん、どうもありがとうございました」

「礼は衛宮士郎と凜に言ってくれ」

「もう言いました」

「……そうか。君は、強いな」

「私、強くなありません」

「いや、本来まだ笑えるほどの心境ではないはずなのに、いつものように笑ってくれている。それが君の強さだろう。多分そういうところに衛宮士郎は惹かれたんだ」

「え？」

「あ、すまない。私たちがいた世界では、君と衛宮士郎がめでたく両思いになっていたのだね」

「イリヤさんが話してくれた、あの状況ですか？」

「ちよつと待て。聞いてないぞ、それ」

いきなりの暴露話に士郎が驚いたのか口をはさんだ。エミヤはそれを無視して続ける。

「桜、この男の心を手に入れたければ、何事も正直にまっすぐ伝えることだ。そうしなければ、こいつは全く気づこうともしないぞ」

「私にそんな資格、ありません。私は」

「人を好きになるのに資格など関係ない」

うつむく桜に、きっぱりとエミヤは言い切った。

「アーチャーさんは何も知らないから。私は汚れてるんです」

「あの世界の衛宮士郎は君のことを知っても受け入れていたぞ。こいつもその辺はかわらないだろう」

エミヤは士郎をちらりと見やっってから、視線を桜に戻した。心から桜を案じていると分かる、真摯な瞳。士郎も一瞬怪訝そうに眉をひそめたものの、やはり心配そうに桜を見つめる。

（二人とも、本当に私のことを考えてくれている　あれ？）

桜は目の前の士郎とエミヤを見比べ、黙って座っている二人のイリヤを見比べ、最後に自分の髪の手を指でつまんだ。

（まさか、そんな……！）

英霊は時間から切り離されたところにいる存在。未来で英雄になった者をサーヴァントとして召喚したとしてもおかしくないのだ。たつたいま、桜は目の前の「アーチャー」の正体に気付いてしまった。アーチャーは一九〇センチ近くの長身、一方士郎はこの年代では身長が低く一七〇センチ弱だが、そもそも男性のなかには二十代半ばくらいまで成長する者もいる。士郎とエミヤ、あまりにもそっくりな表情だったために、つい桜は二人の顔だちを見比べてしまい、あまりにも酷似しすぎていることに気付いてしまったのだ。魔術が絡めば、髪や眼の色などすっかり変わってしまうこともありうる

桜と同じように。

「……桜？」

「どうした、気分でも悪いのかね」

いきなり顔色を変えた桜に、士郎とエミヤは慌てて話しかける。

（やっぱり同じ反応だ。なんで気づかなかったんだろう、私……！）
「どうしてなんですか」

震えながらも桜はエミヤを睨みつけた。

「？」

いきなり睨まれたエミヤは、きょとん、と目を丸くした。そうなる
と妙に幼い印象になって、ますます士郎に似てしまう。

「なんで英霊なんかになっちゃったんですか、先輩……！」

エミヤに向かって怒鳴りあげた桜の目から涙がぼろぼろこぼれ出した。

「さ、桜。いきなり泣かなくても」

さすがのエミヤもうろたえてしまう。

「衛宮士郎、とりあえずハンカチかティッシュはあるか？」

「それにしてもよくわかったよなあ。つい話しそびれてたけど、お前のことも桜にちゃんと話さなきゃダメみたいだな」

士郎はエミヤが慌てているせいかかえって落ち着いてしまい、他人事のようにコメントを述べながらティッシュペーパーの箱をエミヤに手渡した。

「あちゃー」

気の抜けた声に一同が振り返ると、いつの間にか戻ってきた凜が、口元に手を当てていた。

第九話 F a t e ルート後 姉妹の会話、そして（後書き）

今回の姉妹の会話での桜の反応は、HFルートの流れに沿っています。自分の置かれていた極悪な環境をころっと忘れて凜の孤独を思いやる、桜。ここ原作ゲームで読んだとき啞然としました。「自分で自分ばかり不幸なの」とばかりに黒桜になって大暴れたのに、実はとても優しいんです。

ほとんど話が進んでいませんが、ここでエミヤ、桜に正体バレしました。どう考えても英雄なんて穏やかな生活からは程遠いでしょうからね、身近な人間なら泣いちゃうと思う。

第十話 F a t e ルート後 風のように（前書き）

前回の補足っぽい話です。何故かいきなり急展開。

第十話 F a t e ルート後 風のように

（ん、いいにおい）

食欲をくすぐる匂いが眠っていたイリヤの目を覚ました。ここは衛宮邸の母屋の和室のひとつだ。起き上がってみると、まず同じ布団でまだ夢の中にいる桜と凜が目に入る。お互い抱き合って眠っている。

「おはよう、イリヤ」

自分とよく似た声がかげられた。振り向くと、もう一人の自分が部屋の隅で着替えを始めていた。白い長袖のブラウスと紺のフレアスカート、というオーソドックスな装いだ。

「おはよう。あ、そんなの持ってた？」

「いいえ、私はこの身一つで来たのよ？リンが貸してくれたの。二人ともずいぶん遅く帰ってきたのよね」

「よっぽど張り切って蟲を殺してきたのね」

「そうみたい。話は変わるけど、シロ、アーチャーが、シロウのことをとても心配してるの。自分と同じになりそうで怖いんでしょうね。昨夜二人でいろいろ話してたけど、会話が全然平行線で、聞いていて困っちゃった」

「アーチャーじゃ逆効果でしょう。私とサクラとリンがいるんだから、何とかして見せるわよ。それより、もうこの二人、起こした方がいいかしら」

「そうね。えい！」

大きいイリヤは、眠っている凜と桜の上にいきなりダイブした。「ぐえっ」

「な、何事！？」

カエルのようにうめいたのは凜、すぐ目を覚まして叫んだのは桜。凜は朝に弱く、桜は強い。姉妹の違いがよくわかる一コマだ。

「おはよう、サクラ。気分はどうかしら」

「あ、イリヤちゃん、おはよう。えつと……っ！」

桜はさつと顔をこわばらせた。

「思い出したみたいね。でも、詳しい話はあとでね。タイガがきたみたい」

小さいイリヤはにつこりとして見せた。確かに居間の方から、「きやあつ！」と大河の喜びの声が聞こえてきた。

「リン、起きて。朝ごはんよ」

「んー、あと五分……」

「タイガが来たのよ、早く起きて。サクラは元気そうよ」
「ん」

凜は目をこすりながら起きあがった。

「おはよう、桜、イリヤ二人」

「リン、なんて手抜きな呼びかけするの？」

「ひどいわ、リン」

「あんたたち二人ともイリヤでしょ。桜、身体の調子はどう？魔力はちゃんと足りているわよね？」

「魔力……あれ」

桜は目覚めがいつも以上にすっきりしているのに気づいた。普段がつかつの魔力しかないのに、今朝は気持ちよいほどのそれに満たされている。

「詳しい話は藤村先生が出勤してからにして頂戴。早く身支度しないともまずいわ」

「はい」

大河が出かけた後、まず、エミヤが桜に、昨夜士郎が桜に何をしたかを端的に告げた。当然桜はまだ混乱したままで、「もっと早く、せめて聖杯戦争の時に助けてほしかった」的なことをエミヤに向かって怒鳴りだした。

（いい傾向だわ。サクラは我慢しすぎなのよ）

桜に寄り添っていた小さいイリヤの唇の両端がわずかに吊り上がる。

士郎と目が合った。士郎は軽く頷いて見せると、桜に謝っているエミヤを止めにかかった。

（シロウもわかってるのね。一番わかってないのが、リンかしらね）桜の八つ当たりの発言を聞いて、凜は眉をしかめている。桜の言動は、一見、理不尽に見えてしまう。しかし、昨日まで地獄にいた人間が急に解放されて、まともな思考など、できるものではない。桜がエミヤに八つ当たりをしたのは、彼が「遠坂凜」のサーヴァントだから、だろう。桜は姉である凜に救ってほしかった。彼女のいましがたの言動の源は、凜への甘えだ。

「サクラ、とりあえず簡単に説明するから、聞いて頂戴ね」

大きいイリヤが、自分とエミヤの経験した聖杯戦争の概要を説明した。この時、まだ精神的に不安定な桜を心配して、エミヤの正体を言わなかったが、結果的には、桜を甘く見ていた、ということなのだろう。

「先輩、せんぱい……」

ひつくひつく。桜はしゃくりあげながら泣いている。エミヤは士郎から受け取ったティッシュで桜の涙を拭きとりにかかっている。

「悪かったわ、桜。ちゃんと説明するから」

凜はばつの悪そうに首をすくめる。

「まず、ここにいる士郎とアーチャーは、厳密には別人だから。安心して」

「でも、アーチャーさんも、先輩じゃないですか、ひつく」

先輩は先輩です、そう呟きながら、なおも桜は泣いている。

「桜、そんなに泣くなよ」

士郎は苦笑しながらも声をかけるが、

「だって、先輩、全然変わってないのに。優しくてお料理上手で家事が得意で、なのになんで、英雄なんかになっちゃったんですか」桜の返事に、思わず声を詰まらせた。桜の涙を拭いていたエミヤも固まっている。桜は、エミヤの手にそつと自分の手を重ねた。受肉

している彼の手は暖かい。聖杯戦争によばれるような英霊、それも三騎士のひとつであるアーチャーのクラスということは戦闘能力もそれなりにあるということ、どう考えても生前の彼は穏やかな日常からほど遠い環境にいたのだろう。それが信じられなくて、とても悲しい。

エミヤは凍りついたように動けない。遠い昔、結果的に故郷に置き去りにした妹分と目の前の桜が完全に重なる。自分の死を知って、桜はどんなに悲しんだろうかと、頭では理解していても、本当にはわかっていなかったのだろう。自分は死ぬまで自分の命を大切に思うことができなかったが、親しい人間にとっては自分の命は大事な宝物だったのだ。かろうじて声を絞り出す。

「……ごめんな、桜。ありがとう」

ささやくような小さな声だったが、その場の全員の耳にはつきりと届いた。

カウンターガーディアン

抑止の守護者になってしまった経緯をエミヤが簡単に説明すると、桜はややうつむきながらも笑顔で答えた。

「後先考えないでそんなこと、だめですよ、アーチャーさん。先輩も。わかっていますよね？先輩に何かあったら、私、泣いちゃいますから」

「あ、ああ」

「わかつてる」

士郎は桜の笑顔に気おされてしまう。普段穏やかな桜の笑顔が、妙に黒い気がする。エミヤの顔が微妙にひきつって見えるのも、多分気のせいじゃない。外野は少し面白がっている。

「サクラ、怒ってるわね」

「そうね」

「意外にきつかったのね、あの子」

「リンの妹だもの、ね」

「ねー」

「……あんたたちね」

凜はほう、と溜め息を漏らした。凜から見ても、桜の気丈さは意外だった。ただ、よく考えたらあの「蟲蔵」を発狂もせずに耐えきってきたのだから、このくらいは当たり前なのかもしれない。

「アーチャー、皆に紅茶を入れてくれる？ちよつと休憩しましょう」とりあえず、二人のエミヤに助けを入れてやることにした。

（アーチャーの入れる紅茶はやっぱり最高ね）

聖杯戦争の間の短い期間であつたが、凜は自分のサーヴァントの入れる紅茶のとりこになっていた。皆で居間のテーブルを取り囲み、エミヤの入れた紅茶をまったりと味わっている。土郎の表情だけが妙に不機嫌なのは、自分では絶対に出不せない味わいのため、妙に対抗心をかきたてられているからだろう。

「そんな顔しないで、シロウも紅茶の入れ方、覚えたらいいのに」小さいイリヤは目をやや細め、にんまりとしながらそう口にする。

「俺、紅茶ってティーバックしか入れたことない」

お茶なんて日本茶だけで十分だろう、と言いながら、土郎は口に含んだ紅茶をじっくりと味わってしまう。砂糖も入れてないのにほんのりとした甘味さえ感じられる。

（アーチャーのスキルに、「茶坊主 A++」とかあっても驚かないぞ、俺）

正義の味方を目指していた男が、なんでここまでおいしいお茶を入れられるのか。原因はなんだろう、とそこまで考えて、土郎は「原因」に思い当たってしまう。

「アーチャー、もしかしくなくても、お前が紅茶の入れ方上手いので、生前遠坂に仕込まれたのか？」

「そのとおりだ。我が師匠は魔術も紅茶もスパルタ教育だった。お前も凜の弟子なら、今後覚悟した方がいい」

「げ」

「ちよつとアーチャー！」

「事実だ。そういえば倫敦にいたところに橋の上から冬のテムズ川に落とされたこともあったな」

やれやれ、とエミヤは首を振る。皆が一斉に凜を見つめた。

「並行世界の『私』と私は別人よっ！」

があーっと凜は怒鳴る。士郎はこっさり思った。

（どこの世界でも遠坂は「あかいあくま」なんだな）

エミヤは紅茶のカップをテーブルに置き、

「ふざけるのはここまでにしよう。大聖杯の件はどう処理した方がいいかね、凜？」

といきなり真面目に切り出した。

「はあ、全く。大聖杯、ね。冬木の聖杯戦争はローカルだし、毎回失敗してるし、壊したところで魔術協会も聖堂教会も特に何も言うてはこないでしょう」

「問題はアインツベルンね」

凜の言葉に続けて大きいイリヤが付け加える。

「このまま私たちがここに残れるなら、さつさと破壊するけど、世界移動の原因が不明なのに、不用意にやるわけにもいかないし」

「当初はさつさと壊そうと思っていたんだが、よくよく考えるとまづい気もしてな」

エミヤも姉の言葉に追加する。

「なんでさ。理由を説明すれば何とかなるんじゃないかな」

士郎はむっと眉を寄せる。

「汚染された聖杯でも、根源に至る孔を開けられる。アインツベルンがそれしきのことであきらめるわけないでしょう」

小さいイリヤは大人びた表情で弟を見つめて、さらに付け加える。

「大聖杯システムを勝手に破壊した場合、間違いなくアインツベルンが報復に来るでしょう。千年の宿願を台無しにされたら激怒どころじゃすまないわ。うちの戦闘用ホムンクルスはサーヴァント級の馬鹿力を持つてるのよ。アーチャーがずっといられるなら守っても

らうけど、当てにできないし」

「つまり、イリヤは壊さない方がいい、と」

「誰か有力者を味方につけてから、穏便にシステムの解体ができればいいんだけど」

誰か心当たりない？と小さいイリヤは一同を見渡す。士郎と桜はすぐに首を横に振り、凜は考え込み、エミヤだけが、何か思いついたらしく目を見開いた。

「アーチャー、誰か心当たりあるの？」

小さいイリヤの問いかけに、エミヤはこくりと頷いた。

「時計塔のロード・エルメロイⅡ世。確か彼は第四次聖杯戦争でマスターだったはずだ。変わり者だが思慮深い人だったと思う。事情を話せば、多分力になってくれるだろう」

「その人なら、私の留学の際に、向こうで後見人になってくれる予定の人よ。わかった、どうせ留学前に時計塔に一度顔を出さなきゃならないから、何とか話を聞いてもらうことにするわ」

凜はエミヤに頷いて見せる。

「アインツベルンへの対処も君に頼むしかないのだが、引き受けてくれるだろうか」

「私の弟子とその家族の安全がかかっているんですものね。何をしたらいいのかしら」

「昨夜衛宮士郎には話したのだが、聖杯戦争についての事実に基づいた報告、衛宮士郎が遠坂凜の正式な弟子であることの通達、それから、第三次のアインツベルンの失態のせいで第五次に聖杯を破壊せざるを得なかったことの抗議。これらをアインツベルンに伝えるだけで彼らの襲撃の可能性がかなり下がると思うのだが、どうだろう」

「士郎がマスターだったことは隠しておきたかったんだけど……：……：そういえばアインツベルンにはセイバーのマスターだってことがばれてるに決まってるんだっけ」

凜がつい考え込むと、大きいイリヤと小さいイリヤがかわるがわる

口にした。

「シロウがアーサー王の聖剣の鞘を持っているはずだって、アハトおじい様も予想していたからね」

「途中でシロウがリンにセイバーのマスター権を譲り渡したことにすれば、シロウがあまり目立たずに済むと思うけど」

「へ？俺が目立つと悪いのか」

士郎は不思議そうに首をかしげる。エミヤは眉間にしわを寄せる。

「たわけ。昨夜の話をもう忘れたのか？『魔術師殺し』衛宮切嗣の養子が聖杯戦争の勝者だなどとばれたらどうなるか、想像もできないのかね」

「……もしかして、俺が思いっきり警戒されるのか？」

「当たり前だ。お前がもともと一般人の出身だとわかっていてから、まだ甘く見てくれているんだぞ」

「じゃあ、私がセイバーのマスターを引き継いで最終的に勝利したことにすればいいのね。魔術協会には士郎はただの協力者ってことにしてるけど、アインツベルンにそれは通じないもの」

凜は深く頷いた。それから腕時計を見て、あ、と声を上げた。

「そろそろ学校に電話しないと。士郎、電話貸して」

「先輩、私もお借りします」

「俺も一応連絡した方がいいかな」

穂群原学園の生徒三人は、慌てて電話を掛けに行った。残された三人は、何となく顔を見合わせて、静かに笑った。

「これで大体一応今後の方針は決まったのね」

大きいイリヤは感慨深げに呟く。

「後は、サクラがなるべく早くマトウのことをどうするか決めなきゃいけないんだけどね。アインツベルンほどではないけど、あそこも結構財産もちだから、その辺厄介よ」

小さいイリヤもしたり顔で告げる。エミヤは黙って紅茶を入れ直すことにした。

ほどなく高校生組が戻ってきて、しばらくティータイムが続いたが、ふと小さいイリヤがにっこり笑って、

「皆でお出かけしましょう」

と言いだした。士郎はちよつと慌てる。

「へ？でもまズくないか？アーチャーやイリヤはともかく、俺たちどう見ても学校サボってるようにしか見えないぞ」

「無断欠席じゃないんだから平気でしょう。イリヤ、どこに行きたいの？」

凜は空のカップをくるくる回しながら答える。

「昨日は新都の方だったから、柳洞寺とかはどうかしら」

「お寺はまだ修復工事中だけどな。今考えると、よくあれだけで済んだな、と思うぞ」

士郎は聖杯戦争最終決戦の時のことを思い浮かべた。寺院内の敷地がぼろぼろになったのは、自分は見えていないが、セイバーとギルガメッシュの戦いのせいだ。

（一成や零観さんたち、よく無事だったよな）

「でも今の季節なら、桜がまだ残っているでしょう。お花見しましょうよ」

大きいイリヤも微笑んでいる。

（お花見、か。そういえば……）

エミヤは、あの世界の衛宮士郎と桜の「春になったら桜を見に行こう」という約束を思い出さずにはいられなかった。イリヤが士郎に第三魔法を使ったといっても、あのままでは自力で動くこともできないと思われる。ただ、あの遠坂凜なら、何とかしてくれるだろう、そう確信している。

「アーチャーさん？」

自分と呼ぶ声の方を見ると、桜が心配そうにこちらを見つめていた。

「いや、なんでもない。お花見なら、今から弁当でも作るつか」

「ちよつと待て。弁当は俺が作る。アーチャーはできたら洗濯でもしててくれたらうれしい」

また台所^{せいしき}をとられる、とばかりに士郎が話に割り込んだ。

「なるほど、了解した」

エミヤは少し笑ってしまう。自分も家事がなんだかんと言っても好きだが（いつもは本人否定）、やはり目の前のこの少年もそれは同じなのだ。料理の弟子の桜に洋食部門を抜かれてしまっているので、余計に焦っているのだろう。

そこに桜が口をはさんだ。

「洗濯は私がしますから、アーチャーさんはお掃除をお願いします」

「ふむ。……確かに私が女性の下着まで洗うのはまずいか」

この問題発言に凜が顔を赤らめた。

「ちよつとアーチャー、考えすぎ。いくらなんでも私たち、士郎に下着なんか洗わせていないわよ？」

「あら、そうなの。シロウ、アーチャーはムツツリスケベだったのね」

「そりや男の子だものね」

「そこで俺とアーチャーを一緒にしないでくれ……」

二人のイリヤの発言に、士郎はがっくりとうなだれた。

結局このメンバーが衛宮邸を出たのは十一時を回っていた。

「しゅっぱつしんこー」

小さなイリヤはにこにこしながら士郎に纏わりついている。士郎は弁当の包みを両手に提げている。その後ろを凜と桜が手をつないで歩き、最後尾にエミヤと大きいイリヤが小声でしゃべりながら続く。「しかし今更だが、柳洞寺は学園と方向が同じじゃなかったか？まズくないか」

「細かいこと気にしないの」

くすくす、と笑いかけた大きいイリヤは、いきなり立ち止まる。

「イリヤ？」

エミヤもすぐに歩みを止めた。二人揃って周囲を見回す。

凜と桜が後方からの足音が聞こえなくなったのに気づき振り返ると、そこには誰もいなかった。

第十話 F a t e ルート後 風のように（後書き）

ここで大きいイリヤとエミヤは世界移動してしまいました。次回は
この世界の今後、になります。

第十一話 F a t e ルート後 遠坂凜は未来を見つめる（前書き）

少しいつもより短めです。

第十一話 F a t e ルート後 遠坂凜は未来を見つめる

並行世界のイリヤとエミヤは、何の前触れもなく、忽然と消え去った。

二人がいなくなったことに気付いた凜と桜は慌てて士郎とイリヤを呼びとめて、あたり一帯を探した。衛宮邸に急いで戻っても無人だった。彼らの意思とは多分関係なく、「世界移動」とやらが行われてしまったのだろう、と結論付けるしかなかった。大幅に時間オーバーしてしまったが、結局四人で予定通り柳洞寺の近くでお花見をした。士郎の作った弁当はどれもおいしかったのに、四人ともほとんど会話をかわそうとしなかった。沈黙がひどく重い。

「イリヤに服、貸したままになったわね」

ぽつん、と凜が呟いたが、やはり誰も、一言もしゃべろうとしなかった。

冬木の管理者たる遠坂凜は、多くの「宿題」を抱えることとなった。セカンドオーナー

まず、桜の処遇を決めること。これは簡単なようで案外難しかった。本来桜は、臓硯亡き後は間桐家の当主になるべき人間だ。桜が継がない場合、聖杯戦争にかかわる御三家のひとつであるマキリ 間桐が消滅することになる。臓硯は聖杯戦争前によく家を空け、各地にある、管理している土地を巡っていたらしいので、彼が亡くなったことはあまり長くは隠せない。

とりあえず、ひとりであの間桐邸にいたくない、と、桜は最低限のものを持って遠坂邸に引っ越してきた。

「桜、貴女は間桐家を継ぐ気があるの？」

凜は、桜につらい出来事を思い出させることはわかっている、正面切って訊くしかなかった。

「そうですね。兄さんが生きていたら、私は間桐に残ったと思います

す」

そつと目を伏せる桜は、どこか寂しげだ。

「あんた、慎二にぶたれたりしてたじゃないの。それなのに」

納得いかない、と凜は口をとがらせた。

「でも、あの家の中で、兄さんだけが私を『妹』として、『人間』

として見てくれたんですよ？それに、昔は本当に優しかったんです。私が間桐の魔術師だと知ってしまったから、兄さんはおかしくなっ
たんです」

桜は胸の前でそつと手を組み合わせた。凜は、そんな桜に少々うんざりした。実のところ、慎二が桜にどんなことをしていたのか、凜は大体の見当をつけてしまっている。刻印虫に身体中を侵されていた桜は常時魔力不足気味だったはずで、放っておけば命に係わることもあったはずで、魔力を補う手っ取り早い方法は、間桐の直系たる慎二が桜を抱くこと。これに思い当たってしまったとき、凜は目の前が暗くなるのを覚えた。どんな理由があれ、妹を汚した男に好意を持てるはずがないのだ。沈黙している凜に、桜はさらに言葉を重ねた。

「先輩が、アーチャーさんから聞いたそうです。兄さんは、たとえば何をしていたとしても、私の味方だったって。アーチャーさんの生前、兄さんは聖杯戦争で生き残ったらしいんですね。アーチャーさん、私たちのこと、間桐家のこと、生前は本当に何も気が付かなかったらしいです」

さすが先輩だけあって、本当に鈍いですよね、と桜は笑う。

「……まあいいわ。つまり、桜は遠坂に戻ってきてくれるのね？」

「はい。でも、私、魔術師にはなりたくありません」

「最低限でいいから、自衛手段になる魔術だけは覚えなさい。私が教えてあげる。お父さまがなぜ貴女をあそこに養女に出したんだと思う？間桐の要請もあったけど、貴女の魔術属性が架空元素・虚という珍しいものだったから。一般家庭に養女に出した場合、貴女の身が危険だったからなのよ。私も来年には時計塔に行かなきゃなら

ないから、ずっと貴女についていけない」

凜は眉を曇らせる。遠坂の現当主である自分が、時計塔にいけない、という選択肢は存在しない。妹の桜、弟子の士郎、士郎の姉イリヤ、彼らをどうやったら守り切れるだろうか。少なくとも彼らを時計塔には連れて行かない方がいい、ということとはわかる。士郎は禁呪といわれる固有結界の能力者で（展開は現時点では不可能）、桜は統御できなければ怪異を呼び込みかねない魔術属性「架空元素・虚」（そのため一般人として育てるのが不可能だった）で、イリヤはアインツベルンの「聖杯の器」、三人とも魔術協会にばれたら即実験材料になりかねないような存在なのである。

（アーチャーが残ってくれていたらよかったのに）

アーチャーことエミヤは当然この時代に詳しい。魔術協会や聖堂教会への対応も彼なら多分無難にこなせそうだし、勿論戦闘能力は大抵の魔術師にはまず負けるはずがない。彼のように信頼できるサーヴァントが冬木にいてくれれば、何の憂いもなくこの留守を任せられるのに、と今更どうしようもないことをちよっただけ考えてしまふ。

「姉さん？」

考え込んでしまった凜に、柔らかな声が届く。

「私、頑張りますから。姉さん一人だけで抱え込まないでください
ね」

目を上げると、桜はいつものように穏やかに微笑んでいる。

「かなわないな、桜には」

凜も微笑み返した。

もつとも、桜はいまだにマキリの業から心理的に完全に解放されたわけではない。毎夜のように悪夢を見続けているようで、悲鳴を上げて飛び起きるのを、凜が抱きしめて落ち着かせている。大抵、桜は死んだ慎二に謝罪を繰り返している。自分だけ救われて、慎二に申し訳ない、と思うらしい。

「慎二の奴は自業自得なのに、何で謝るのよ」

すっかり凧はこう口にして、桜を怒らせてしまい、言いたくなかったであろうことを言わせてしまったことがある。

「姉さんは何も知らないから。私が兄さんを傷つけてしまった。兄さんを狂わせたのは私なんです」

納得いかない、という顔をする凧に向かって、桜は嗤って告げた。

「それに、私は薄情なんですよ？兄さんが死んだあと、おじい様は一般の男性^{ひと}たちを巻き込んで、私と蟲たちの魔力補充に使ったんです。私は人殺しの共犯なんです。でも、普段は何も知らない顔してました。私は汚れているんです。姉さんは、私のように汚れていないでしょう？」

間桐邸の「蟲蔵」で発見した遺体は、攫われてきた一般人だったのだ。ある意味、臓硯だけでなく桜も彼らをエサにしたことになる。

「ごめん」

凧は震える手で桜を抱きしめた。慎二と桜、長年兄妹であつた二人の關係に、凧はもう何も言うことを許されないと悟つた。それにしても、なんで桜ばかり苦しまなければならぬのか。心の中で毒づく。

桜が遠坂邸に移ってから、衛宮邸の朝食メンバーは、士郎、大河、イリヤの三人になった。そのかわり、夕食は凧と桜も加わってにぎやかになる。

「リン、アインツベルンへの連絡の時、私からの手紙も同封してもらえないかしら」

夕食後、大河の帰宅後、皆でくつろいでいたそんなある日、イリヤは一通の封書を凧に手渡した。宛先は、アインツベルンの現当主、コープスタクハイト・フォン・アインツベルン、通称アハト翁。イリヤにとっては厳しくて優しい「アハトおじい様」である。

「何書いたの、イリヤ」

「一言でいえば、『出来たら一度お会いしたいので、冬木にいらっ

「しゃいませんか？」

「イリヤ、なんてこと書くのよ」

「いけないかしら？ 生きているうちにもう一度会いたいただけなのに」

「イリヤ！？」

士郎がぎよつとしたようにイリヤを見つめる。

「シロウ。私、身体を取り換えたりする気はないから。シロウのそばに今はいるつもりだけど、死んだら私の身体はおじい様に引き取ってもらいたいと思っているの。……アーチャーたちがいなくなつてから、これでもいろいろ考えたのよ？ 私は向こうではずっと一人だったけれど、少なくともアハトおじい様だけは私の味方だったつてこと、思い出したの。シロウは私の家族だけど、おじい様も家族なの」

イリヤは静かに言った。 イリヤの言葉には裏がある。魔術師である凜には判る。

イリヤのアハト翁への気持ちは本心だろうが、それだけではなく、自分があくまでもアインツベルンのものであると伝えて士郎への風当たりを最小限におさえる。それが彼女にとっての最優先事項なのだろう。

黙っている凜に、イリヤは重ねて付け加える。

「セラヤリズとももう一度会いたい、と思っているの」

「確かイリヤのメイドさんたちだったよな」

士郎は、一度も顔を合わせていないが、イリヤから聞かされていたことを思い出す。凜は目を伏せて答える。

「わかった。イリヤの言うとおりにする」

イリヤが安堵、士郎が焦燥、桜が懊悩の表情をそれぞれ見せると、凜はにやりとして、

「なーんて言うと思う？ イリヤ、あんたは生きるべきよ」

と言い放った。

「封印指定の人形師は行方知れずだけど、だいぶ前に作られた人形を見つけることはできたの。代価はマキリの魔術書でも売り払えば

何とかなると思う」

凜はちらりと桜を見つめ、相手が頷くのを見て続ける。

「アハト翁に、『身体は差し上げる代わりにここで生きることを許してほしい』とお願ひしてみて頂戴。一緒に文案考えましょ」

「リン、ちよつと」

「生きているうちに、身体を渡したつて同じことでしょうに。外部に貴女の身体が渡らなければ、アインツベルンへの裏切りにはならないでしょう？」

「うー……」

イリヤは泣きそうな顔で唸る。士郎はそんなイリヤの両肩にそつと手を置く。

「イリヤ、俺からも頼む。

お願いだ、生きられるなら、生きてくれ」

本当の両親は十年前、自宅ごと、炎の中に消え、養父の切嗣も五年前に死んだ。せつかく会えた切嗣の娘のイリヤにまで死なれたくない。そんな士郎の想いは、この場の者たちには既に自明の理である。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは「聖杯の器」となるべく厳しい教育を受けてきた。どんなにつらくてもそれが当たり前のことなのだ。父の跡を継いだ凜にはわかる。魔術師とは、先代の敷いたレールにさらに継ぎ足しながらその先を進むものだ。凜や士郎の、イリヤに対しての提案は、ある意味そのレールから降りると言っているようなものだ。

（イリヤは厳密には「魔術師」ではないんだけど、ね。何もしないでこのまま寿命を待つより、いいと思うんだけど）

「……ずるいわ、シロウ。そんな顔されたら、私、生きるしかないじゃない」

イリヤはそつと士郎の頬を両手で挟む。士郎の表情は、どこか置いてきばりに合った子供のようだ。

「お姉ちゃんは弟を守るものなもの。わかった。生きてシロウを守

る」

よろしくね、リン、と、イリヤは天使を思わせる清らかな笑顔で言い切った。

「任せなさい」

凜は胸を張った。

士郎を大切に思うイリヤと桜、それに大河が士郎から離れずにいてくれれば、「正義の味方」に固執する士郎の運命も良い方向に変わるだろう。勿論凜も士郎を「指導」するつもりでいる。

遠坂凜は、自分が「うっかり」スキル持ちのまだ未熟な魔術師だという自覚は持っている。ただし、常に自分は「最強で無敵」だと思いつくことにしている。そうすることで、本当に強くなれると信じているから。

今の状況は、悪くはないが、まだまだ先は見えない。

桜が本当の意味で立ち直れるか。

士郎が普通の幸せを手に入れられるか。

アインツベルンがイリヤの延命を認めてくれるか。また、暴走しないか。

大聖杯システムの解体は果たして間に合うか。

それでも、できるだけ、皆でハッピーになることを目指していきたい。

凜は、衛宮邸での団欒のたびにそう思っていた。

第十一話 F a t e ルート後 遠坂凜は未来を見つめる（後書き）

イリヤの身体をどうするか、かなり迷いました。桜が間桐から出る以上、間桐家の魔術書は不要になるので、結局H Fルートtrueエンドと同じ手段をとることにしました。イリヤが身体を取り換えること、アハト翁は許してくれるかもしれませんが、どうなんでしょう。

プロローグ H e a v e n ' s F e e l ルート 大聖杯にて、願いの始まり

いまごろこの話のプロローグです。今回述べられるアーチャーの過去やイリヤの思いはほとんど捏造設定です。

外部からは魔術的に巧妙に隠された円蔵山の地下空洞を、アインツベルンの今代の「聖杯の器」イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは、主として白色と金色で構成されたティアラと短いローブ、太ももがちらりと見える白いストッキング、肩にかかった赤い帯、といった「天のドレス」といわれる礼装を身に纏い、悠然と歩いている。ほぼ十歳くらいにしか見えない幼い外見だが、イリヤのその姿は「冬の聖女」と謳われたユスティツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンを彷彿とさせ、一種荘厳な清らかさを体現していた。

だからこそ、先ほど出会ったマキリ・ズオルケンのなれの果てであつたあの蟲も、最後に原初の誓いを思い出し、胸に抱いて逝くことができたのだらう、と、見ている者がいればそう思つたに違いない。

イリヤにしてみれば、自分のサーヴァントであるバーサーカーを失つた今、もう聖杯戦争などどうでもいい、というのが本音だ。弟の士郎もイリヤが聖杯になることを望んではない、それでも今いかなければ、士郎は確実に命を落とすだらう。

（本当は、あの子を殺すつもりだったのにね）

第四次聖杯戦争を終えた後、父の衛宮切嗣は帰つてこなかった。親子でかわした約束を信じてずっと待つていたのに。「冬の聖女」を原型として生まれたイリヤの中には、ユスティツァから始まる代々のホムンクルスの「記録」がある。母は死んでしまっているが、自分の中にいる。だから、父さえ帰ってきてくれば、イリヤとしては文句などなかったのに。切嗣は聖杯戦争を生き残ることができたのに、イリヤのいる城へ戻つてこなかったのだ。それどころか、子供を引き取り手元で育てているという。

（どうして？私が何をしたというの。その子は私の代わりなの？）

聖杯を得るのに失敗したのにはやむにやまれぬことがあったのかも、とは思える。しかし、約束を破って帰ってこない、しかも養子を育てている、というのはイリヤにとって絶対に容認できないことだった。

どうも大聖杯に魔力がだいぶ残っているために、第五次聖杯戦争までさほど年数がかからない、とわかると、アインツベルンのイリヤに課した調整や教育は厳しかった。もう外部の魔術師などあてにしない、とばかりに。特にアハト翁は、イリヤが冬木で聖杯戦争のマスターになった際に困らないように、聖杯戦争は夜間に行うことや、敵のマスターは必ず殺すことなど聖杯戦争のルール、それに加え日本語や日本文化についてかなり詳しく教えてくれた。後に日本に渡って、アハト翁の日本文化の知識にかなり妙な勘違いがあるらしいことに気付いたが、それは愛嬌の範囲だ。

聖杯戦争が始まる二か月前にバーサーカーとしてギリシャの大英雄ヘラクレスを召喚して、実際に聖杯システムが起動を開始するまで、イリヤは血反吐を吐くような苦しい試練にさらされた。バーサーカーのサーヴァントは著しく燃費の悪いクラスだ。それなのにわざわざこんなクラスにしたのは、アインツベルンがもはやサーヴァントに自意識など求めなかったからだ。アーサー王であるセイバーとマスターの切嗣が全くかみ合っていなかったことくらい、アインツベルンでも一応調べをつけている。命令通りに動かないサーヴァントは必要ない。だから、あえて危険を冒し冬木の衛宮邸を訪れてまで、アーサー王の聖剣の鞘を取り返そうとはしなかった。聖杯戦争が正式に始まるまで、聖杯の下支えなしでバーサーカーを現界させておくのに、本当にイリヤは苦しい思いをした。しかし、バーサーカーは、バーサーカーのくせに、狂った戦士なのに、イリヤに対してとても優しくかった。まるで父親のようだった。

（できれば、ずっとバーサーカーと一緒にいたかった）

冬木についてから、住宅街の夜道で見かけた義理の弟の士郎は、まるきりただの学生に見えた。なんせサーヴァントをあの手で召喚していなかった。ついふざけて「お兄ちゃん」と呼んでやったが、彼は何のことかわかっていないようだった。

やがて士郎がセイバーとして予測通りアーサー王を呼び出し、冬木の管理者遠坂凛とともに教会にマスター登録を済ませた後、それを見計らい待ち伏せして対峙した。

予想通り、バーサーカーは強かった。セイバーも善戦したが、格が違かった。セイバーの正体は知っていたし今更興味もなかったが、その戦いでバーサーカーの命を一つ奪う、という快拳を成し遂げた凛のサーヴァントであるアーチャーにはとても興味がわいた。バーサーカーがヘラクレスでなかったら「十二の試練^{ゴッドハンド}」という命のストックと蘇生の重ね掛けという反則スキルもなく、彼の前に敗れ去っていただろう。まるで赤い服を着た凛とお揃いのように赤い外套をその身に纏ったアーチャーのステータスは、決して高くないのであるが、仮にも遠坂のサーヴァント、ヘラクレスほどでなくとも名のある英雄なのだろう。ただ、それにしても。

（なぜバーサーカーのマスターである私を狙わなかったのかしら）
案外マスターである遠坂凛に似てお人よしなだけかも、とその時は深く考えなかった。まさか、可能性未来から招かれた英霊だなど、しかも正体が自分の義弟^{シロウ}だなどと、いったい誰が想像できるというのか。やがて凛とアーチャーは、間桐臓硯の動向や冬木のあちこちに出現する異様な闇などの異常に気付き、活発に動き回りだした。かつて正義のために戦っていたという切嗣なら案外同じように動くかもしれない、と何となく思ったが、それでも気が付かなかった。士郎は聖杯戦争のことをもちろん気にしてはいたが、体調を崩した桜のことを一番に考えていた。なぜか敵対しているはずの自分にも優しく、士郎に接しているうちに、気が付くと抱いていたはずの殺意は波が引くように消えていた。

（私はただ、寂しかっただけなんだ）

士郎はイリヤの弟。血がつながっていなくても、切嗣が自分に残した家族なのだと、そう悟ってしまったら、もう恨むのが難しい。パトナーのセイバーを失い、冬木の異常に桜がかかわっているらしいと知っても、士郎は苦しみながらも愛する桜の味方であることを選び、そのこともなおさらイリヤにとっては喜びだった。

バーサーカーが闇に飲み込まれ敗れ去った後、今度は黒化して敵としてイリヤたちの前に立ちふさがったとき、凜のアーチャーの奮戦ぶりは群を抜いていた。アーチャーのクラスは遠距離攻撃が得意のはずで、接近戦には決して向いていないはずなのに、彼の戦いぶりはセイバーに匹敵していた、といっている。その後アーチャーが油断した己のマスターをかばって謎の闇により霊核に致命傷を負い、士郎も同じように呪いの闇で肩口から左腕をばっさりとやられて同じく致命傷を負った。アーチャーがせめてもと士郎を助けるための手立てを提案したのには驚くしかなかった。サーヴァントの腕を人間に移植する、などと。信じがたいことにそれはあの怪しい神父言峰綺礼の手によって成し遂げられ、それを見届けたアーチャーは残った腕で凜の髪を優しくなで、「遠坂」と曰ごろにない呼び方をし、消えていった。聖杯の正しい器たる、イリヤの中へ。他のサーヴァントたちが「マキリの聖杯」にされた桜の中に消えてしまったのに、もうこれは運命だろう。その時、イリヤは完全にアーチャーの正体を理解した。士郎にインツベルン城への道順を教えるために精神同調したことがあるので、アーチャーが士郎と全く同じ魂を持っていたことがわかってしまった。アーチャーは、ことは別の世界の、未来で英雄となった衛宮士郎その人だった。同一人物同士だからこそ、かろうじて腕の移植で死んでしまうはずの士郎を生かすことができたのだ。

イリヤは、アーチャーの「記録」をたびたび見るようになった。厳密にはアーチャーはまだ、一部分だけ、士郎の左腕として現界して

いるので、魂が分割されているような感じとっていいのだ。

アーチャーの、冬木大火災の記憶、切嗣の笑顔、切嗣との別れの記憶、聖杯戦争の記憶、いろいろ断片的に見ることができる。アーチャーの生前経験した聖杯戦争では、今回のように呪いの闇やマキリの聖杯など一切なかったらしく、苦勞しながらもセイバーとともに勝ち抜いて、天上に出現した黒い孔を切り裂いて終わらせたい。アーチャーの記憶にも「イリヤ^{じぶん}」がいた。聖杯戦争中でありながら仲良く公園でおしゃべりをしたり、かと思えばイリヤが士郎を捕えてアインツベルン城の自室で対峙したり……。聖杯戦争後、イリヤはアインツベルンに戻らずに冬木に残り、衛宮邸で士郎と暮らしていて、姉貴分の大河も妹分の桜もしばしば衛宮邸に泊まりにきていた。凜も魔術の師として士郎に接するとともに、イリヤを気にかけてくれていた。イリヤの身体がだんだん動かなくなってくると、士郎が学校にいる時間のイリヤの面倒を見るために、後見人の藤村雷画が、介護の人員を手配してくれなどしていた。

（アーチャー、こんなに「私」を大事にしてくれていたんだ）

切嗣について、イリヤにとって救いになる情報もあった。生きていたころ、切嗣はたびたび弱った身体を押して士郎に留守番をさせて海外に出かけていたらしい。もう傭兵のような仕事などできるはずのない身体で海外に行く、その理由は。

（キリツグ、私を見捨てていなかったのよね？来てくれたのに、アハトおじい様に追い返されたのよね？）

そう感じたら心がとても軽くなった。士郎の味方になる、その決意をさらに後押ししたのは、アーチャーの記録の中かなり鮮明に残っている、士郎をかばってイリヤがアインツベルンに殺される、という情景だった。

（「アハトおじい様は違う」と思いたいけど、私は、アインツベルンにとつてはただの人形、道具にすぎないんだものね。私はどうせ長くない。この命は、シロウのために使おう）

士郎の現在の投影はアーチャーの左腕を使用している。聖骸布の封印を解いてしまっている。でサーヴァントの霊格に人間である士郎は浸食され続けており、しまいには死ぬ。士郎が自分の命を賭して、桜のため、呪いの元を完全に滅するため大聖杯システムを破壊しようとしているのなら、姉として、彼を救わなければ。

「バーサーカーのマスター、ですか」

ふいに前方からきつぱりとした女性の声が響いた。暗闇でもはっきりわかる美しい髪を持ち主、ライダーのサーヴァント。彼女は両脇に気を失ったままの凜と桜を抱えて、イリヤの目前で立ち止まった。「ここはもうすぐ崩れますよ。士郎もじきに来るそうです」

「そう。シロウはサクラを闇から解放したのね」

「そうですね、リンと士郎、二人でサクラを助けてくれました」。

その姿は？」

ライダーは「天のドレス」を纏ったイリヤをしげしげと見つめる。

「天のドレス」は、人間には決して触れられず、もし触ったらその身が黄金と化してしまう、というもの。普通の服と違うものだと、ライダーにも見ただけで何となくわかった。

「私は聖杯の器として動く。シロウは必ず助けるわ。早く行ってちょうだい」

イリヤに促されて走り始めたライダーの耳に、

「だって、私はお姉ちゃんなんだから」

決然とした声が聞こえてきた。

やがてイリヤが目にした士郎は、ぼろぼろだった。身体から何本もの剣が突き出っていて、なんというか鉄くずでできた木偶人形、という表現がふさわしい姿。信じがたいことに、士郎はさらに投影を行おうとしている。彼の知る最強の剣、アーサー王の聖剣エクスカリバーを。確かに大聖杯は破壊できるだろうが、そんなことをすれば士郎は確実に死ぬ。

「とう、え」

呪文を詠唱しかけて、士郎は迷っている。桜と生きたいと、願っている。よかった、間に合った！

「うっん、シロウは死なないよ。だって、この門を閉じるのは私だから」

士郎に話しかけ、投影をやめさせる。士郎は懸命に私の名を呼ぼうとする。私を引き留めようとする。もうだいたい英霊の浸食によって思考が、記憶が削られているはずなのに、忘れてしまったはずの私の名を呼ぼうとしている。

「じゃあね。私とシロウは血がつながっていないけど、シロウと兄妹で本当によかった」

それから、多分士郎が気づいていないはずのことを、自分の方が「お姉ちゃん」なのだと告げて、「天のドレス」を纏ったイリヤは、大聖杯の中心部へ歩みだした。

「イリヤ。イリヤ、イリヤ、イリヤ、イリヤ！」

士郎の悲痛な叫び声を背後に聞きながら、イリヤは大聖杯を起動した。桜の中にいたサーヴァントはここで自分の中に回収し、士郎の左腕にいるアーチャーの一部も回収し、ライダーを除くすべてのサーヴァントが自分の中に納まった。聖杯を完成し根源への孔を一時的にあげ、士郎に第三魔法を使うことにする。それしか士郎の命を救う道はない。士郎の身体には臨時でイリヤの身体を使用するしかないのが難点だが。士郎がイリヤのことを思い出せたのは、あるいは浸食しているアーチャーによって補填されたのかもしれない。意外に移植の後遺症が軽くて済むかもしれない。士郎は、桜とともに生きべきなのだ。

（後はリンが何とかしてくれる。期待して、いいわよね）

イリヤは、「この世^{アンリミュ}全ての悪」を生み出さないためにも全力で大聖杯の起動を停止した。最後に残った意識で、ちらりと思ってしまった。

やっぱり、シロウと一緒にいたい

おそらく空耳なのだろう、聞き覚えのある低音で、イリヤに語りかける、優しい言葉が聞こえた。

オレがイリヤを守るよ。たとえどんなところに行くとしても、一緒にいよう

ブローグ H e a v e n ' s F e e l ルート 大聖杯にて、願いの始まり

Hフルートのイリヤ視点からのダイジエストっぽい話でした。 勿論最後の声は「彼」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3135u/>

ある、姉弟の願い

2012年1月13日21時56分発行